

## 江馬修『山の民』研究序説〔九〕

### ——改稿過程の検討（九）・冬芽書房版から理論社版へ（中の上）——

柴 口 順 一

（帯広畜産大学人間科学研究部門）

二〇一二年四月二十六日受付

二〇一二年七月 九日受理

An introductory study on Shu Ema "Yama no Tami" [9] :  
A research on the process of rewriting (9) ・ From Toga Shobo version to Riron Sha version (B-x)  
Jun'ichi SHIBAGUCHI

### はじめに

前稿においては、江馬修『山の民』の第三の改稿、すなわち冬芽書房版から理論社版への改稿を検討した。

比較にあたっては、第一、第二の改稿の場合と同様、便宜的にそれぞれの本文を単位に分け、おおよそ構成の変更、新たに加えられた部分、そして省かれた部分の順に検討を加えた。ただ、その際にも断わっておいたように、それらはあくまでも単位レヴェルの変更であった。いわゆる単位内における変更も少なくなかったこともすでに指摘しておいた。そこで、本稿以下ではその単位内における変更について検討する。単位分けは各本文の章に加えて、各章中に行なわれる一行あけによる区分を併用したものであることは改めて確認するまでもない。本稿では第一部の改稿を検討する。

### 一

前稿においては、それぞれの本文を単位に分け、内容のごく簡単な要約を付しておいた。第一、第二の改稿の際には、いずれの場合にも対象となる学会版における単位の要約を行なったが、そこでは新たに理論社版における単位の要約を行なった。第三の改稿では対象とならない学会版の単位をもとにするのでは、やはり混乱を避けられないと考えたからである。また、理論社版は一応の決定稿であり、その意味でも新たな要約は無意味ではないと考えたからである。

単位内における変更を検討するにあたってもそれを利用し、まずはおおよその変更を整理することからはじめる。第一、第二の改稿の場合と同様、前稿で作成した一覧に単位内の変更を書き加える。変更は、構成の変更、新たに加えられた

部分、省かれた部分の三つに分け、それぞれ△、④、□の記号を付し、④と□、すなわち新たに加えられた部分と省かれた部分についてはその内容の簡単な要約を付す。構成の変更についてはそれを簡単に記すことが困難なため、△の記号のみを記すにとどめざるを得ない。それについてはのちに行なう検討の際に説明する。以前作成したものには各単位のページを記しておいたが、今回はそれを省く。そのかわりに、追加部分と省略部分にはページ並びに行数を記す。当然ながら、追加部分のページは理論社版の、省略部分は冬芽書房版のそれである。ちなみにいっておけば、冬芽書房版は一行四十五字、理論社版は一頁二段組みで一行二十四字である。④、□及び△にはそれぞれ番号を付しておく。ページ並びに行数は「」をはさんでその順に記す。

## 第一部 ひだの国

### 一

【1】(慶応四年一月二十三日)手代寺田潤之助、早駕籠で郡代役所へ帰参。

□ 1 あたりの様子。(3／6)

△ 1

【2】寺田、郡代新見内膳へ情勢報告。

④ 1 新見郡代の様子。(5下／6)

④ 2 寺田潤之助と郡代の様子。(6上／5)

④ 3 浅井豊助の言葉。(7上／5)

【3】深夜、役人呼びに行く。

### 二

【4】大評定の末、郡代役所を鎮撫使先発隊へ明け渡すことに決定。

△ 2

④ 4 先発隊が飛驒に向かおうとしているとの情報。(10上／5)

④ 5 浅井の言葉(の一部)。(10上／下／8)

④ 6 浅井の言葉(の一部)。(10下／11上／13)

④ 7 新見郡代、大沢謙介、浅井らの会話(の一部)。(11上／12上／34)

□ 2 浅井の言葉と様子。(13／3)

④ 8 大沢の言葉(の一部)。(14下／5)

④ 9 近藤英一郎の言葉(の一部)。(14下／4)

△ 3

④ 10 大沢と浅井の会話(の一部)。(15下／16上／10)

□ 3 郡代の様子。(17／4)

□ 4 地役人らの様子。(18／4)

④ 11 郡代の考え。(17上／下／9)

【5】評定の決定を町会所・郡中会所の役人呼び報告。

### 三

【6】地役人ら、評定の話しをしながら奥田大蔵の屋敷へ向かう。

④ 12 地役人らの会話(の一部)。(20下／21上／6)

【7】地役人ら、奥田邸での相談の結果、天朝への帰順を決定。

④ 13 地役人らの会話(の一部)。(22上／8)

④ 14 地役人らの会話(の一部)。(22下／23上／11)

④ 15 富田稲太の言葉(の一部)。(24下／8)

④ 16 「降伏」を改め「帰順」と称することの話し合い。(25上／27下／75)

【8】その後、奥田邸で酒宴。

### 四

【9】事情を聞きつけた人々の混乱。

△ 4

④ 17 人々の会話(の一部)。(33下／34上／24)

【10】(二月二十四日)新見郡代、先に出発させる妻子の供を地役人に依頼するが拒絶される。

【11】郡代の妻子ら、江戸へ向け出発。

### 五

【12】(二月二十五日)鎮撫使先発隊の警護として郡上藩入国の知らせ。

④ 18 人々の不安。(42下／43上／20)

- 【13】安永年間の大原騒動について。
- ⊕ 19 郡上藩家老鈴木兵左衛門の思惑。（43下／44上／20）

- ⊕ 20 新たな検地の実施について。（46下／13）
- ⊕ 21 幕府への直接嘆願について。（47下／48上／16）
- ⊕ 22 大原郡代の大金借り上げと人々の不満。（51上／下／15）
- ⊕ 23 幕府の取り調べについて。（52上／下／13）
- ⊕ 24 百姓側の処分。（52下／7）
- 5 大原郡代の墓は今日も残っていないこと。（59／4）
- ⊕ 25 郡上藩の策略とそれに対する飛驒の人々の警戒心。

（53上／54上／29）

六

- 【14】郡中会所について。

- ⊕ 26 地役人の言葉。（54上／4）
- ⊕ 27 郡中会所の役割。（55上／下／14）
- ⊕ 28 多数の村役人が次第に集まる。（56上／6）
- ⊕ 29 村役人らの会話（の一部）。（57上／下／23）

- 【15】郡中会所二階での、村役人の対郡上藩対策についての寄り合い。

- ⊕ 30 郡中会所二階の様子と村役人らの様子。（57下／58上／15）
- △ 5
- ⊕ 31 村役人らの会話（の一部）。（58下／6）
- 6 村役人らの会話（の一部）。（63／64／10）
- ⊕ 32 甲村孫助の言葉。（59上／4）
- ⊕ 33 村役人らの会話（の一部）。（60上／下／18）
- ⊕ 34 村役人らの会話（の一部）。（61下／5）
- ⊕ 35 村役人らのその後の行動。（62下／4）

七

- 【16】郡中会所階下での、百姓たちの郷蔵廃止願いについての寄り合い。

- ⊕ 36 郡中会所階下の様子。（63下／10）

- ⊕ 37 百姓たちの会話（の一部）。（66上／4）

- ⊕ 38 百姓たちの会話（の一部）。（68上／下／30）
- 7 百姓たちの会話（の一部）。（74／76／19）
- ⊕ 39 郷倉について。（71上／下／22）
- 8 百姓たちの会話（の一部）。（78／79／15）
- ⊕ 40 百姓たちの会話（の一部）。（72上／下／11）
- ⊕ 41 百姓たちの会話（の一部）。（73上／74上／22）
- 9 百姓たちの会話（の一部）。（81／82／10）
- ⊕ 42 忠七に加え清六も総代となる。（74上／下／10）

八

- 【17】百姓総代、村役人へ郷蔵廃止願いを提案し、郡代への願書提出を決定。
- 【18】郡上藩攻め入るのうわさで混乱する人々。

- ⊕ 43 陣屋表門前の様子。（83上／6）

九

- 【19】新見郡代、御倉米の処置を指示。

- 【20】郡上藩入国の知らせが届く。

- △ 6

- 【21】新見郡代、江戸へ向け出発。

- ⊕ 44 郡代、動けなくなり人に背負われ進む。（90下／上／9）

- ⊕ 45 新見郡代の感慨。（91下／7）

一〇

- 【22】牛方親子、道端の地蔵尊類が消えているのを発見。

- ⊕ 46 牛方源兵衛の容貌と体格。（94下／5）

- △ 7

- ⊕ 47 牛方親子の会話（の一部）。（98下／8）

- 【23】牛方親子、百姓たちの不動尊撤去の現場に遭遇。

- ⊕ 48 百姓と源兵衛の会話（の一部）。（102上／下／12）
- ⊕ 49 百姓たちの様子。（102下／103上／5）

【24】 牛方親子、峠の茶屋で一服し、老婆・百姓と語り合う。

⊕ 50 茶屋の客、百姓女の容貌と身なり。(104下～105上／16)

□ 10 百姓女と牛方の会話(の一部)。(119～120／9)

⊕ 51 百姓女、茶屋の老婆、源兵衛らの会話(の一部)。(105下／9)

⊕ 52 百姓女の言葉と様子。(106上／12)

⊕ 53 源兵衛の息子幸作、百姓女、源兵衛、老婆らの会話(の一部)。(107上～下／24)

⊕ 54 源兵衛の様子。(108上／5)

⊕ 55 百姓女の言葉。(108下109上／6)

⊕ 56 百姓女の様子。(110上／5)

⊕ 57 源兵衛と老婆の会話。(111上／10)

一一

【25】 (一月十日)竹沢寛三郎、京都を出発し飛驒入国の布石として笠松郡代役所を帰服させる。

所を帰服させる。

⊕ 58 岩倉具視の様子。(117上～下／9)

⊕ 59 岩倉と竹沢の会話(の一部)。(118下～119下／42)

⊕ 60 岩倉と竹沢の会話(の一部)。(120上／5)

□ 11 朝廷の命を受け郡上藩も飛驒へ向け進発。(136～137／8)

一二

【26】 郡上藩入国し、人々反発を強める。

⊕ 61 情勢不安の折、鎮撫使先発隊に期待を抱きはしめる人々。(122上～123上／37)

⊕ 62 役所から出された布告について。(123下～124下／41)

△ 8

⊕ 63 竹沢の一刻も早い到着を待つ人々。(126下／6)

⊕ 64 対郡上藩の方策を議論する人々。(127上～下／12)

⊕ 65 村役人らの会話(の一部)。(128上／14)

【27】 郡中会所総代、竹沢を迎え口上書を差し出す。

⊕ 66 鎮撫使先発隊、郡上藩の兵と合流。(128上～下／7)

△ 9

⊕ 67 竹沢、郡中会所及び安石代について問う。(129下～130上／11)

□ 12 郡中会所の存在を知る竹沢と、口上書第一項について。(144～145／11)

□ 13 口上書第三項について。(145～146／8)

□ 14 総代、再度の嘆願の機をうかがう。(154／5)

【28】 地役人・郡中会所の迎えを受け、竹沢飛驒に入る。

△ 10

⊕ 68 竹沢が以前訪れたときは変わったあたりの様子。(132上～下／12)

⊕ 69 先発隊進行の様子。(133上／5)

△ 11

⊕ 70 先発隊兵士の様子。(133下～134上／6)

⊕ 71 兵士たちの会話。(134下～135上／21)

一三

【29】 郡中会所総代ら、手代近藤英一郎に出くわす。

【30】 近藤、竹沢及び郡上藩家老鈴木兵左衛門に願ひ出、郡上藩の一部退去に成功。

成功。

⊕ 72 近藤英一郎、飛驒の人々が郡上藩を嫌う理由を説明。(142上～下／12)

⊕ 73 近藤、郡上藩に飛驒横領の野心があることを主張。(142下～143上／10)

⊕ 74 近藤の言葉。(144上／9)

⊕ 75 鈴木木の様子と態度。(145上／9)

⊕ 76 鈴木木の様子(の一部)と近藤の反応。(146上～下／16)

⊕ 77 鈴木と近藤の会話(の一部)。(147下／8)

△ 12

⊕ 78 人々の会話（の一部）。（149上／下／8）

□ 15 人々の会話（の一部）。（162／163／4）

【31】（二月三日）竹沢、多くの人々に迎えられ高山に入る。

【32】竹沢に次ぎ、郡上藩の一部高山に入る。

一四

【33】竹沢の到着に人々ひとまず安堵。

⊕ 79 安堵する人々とその会話。（152下／153下／33）

【34】（二月四日）地役人、竹沢にこれまで通りの召し抱えを願ひ出、了承される。

⊕ 80 夜、地役人は祝宴をあげる。（155下／156上／8）

【35】郡中会所の人々、竹沢を礼賛。

△ 13

⊕ 81 村役人らの会話（の一部）。（156下／157上／13）

⊕ 82 村役人らの会話（の一部）。（157上／10）

⊕ 83 村役人らの会話（の一部）。（157下／159上／47）

【36】郡上藩のうわきをしているなか、家老鈴木から呼び出しを受ける。

⊕ 84 一層高まる郡上藩への警戒。（159下／160下／45）

⊕ 85 郡中会所総代らの会話。（161下／162下／40）

一五

【37】郡中会所総代、郡上藩鈴木のもとへ向かう。

△ 14

⊕ 86 代官橋付近の様子。（164上／下／30）

⊕ 87 橋の手すりに結びつけられる荷物について。（164下／165上／10）

⊕ 88 郡中会所総代らの会話（の一部）。（165下／13）

△ 15

⊕ 89 孫助と牛方源兵衛との会話。（166上／167上／36）

⊕ 90 総代らの会話（の一部）。（167下／12）

【38】町会所の総代とともに鈴木のもとへ。

⊕ 91 途中、町会所に寄り町年寄屋貝と同道。（168上／169上／29）

⊕ 92 火方らの言葉。（170上／6）

□ 16 屋貝と市次郎の会話。（177／178／6）

⊕ 93 総代らの会話。（171下／172上／11）

一六

【39】郡上藩家老、米三百俵を提供する旨を伝えるが、辞退される。

⊕ 94 屋貝の言葉と総代らの挨拶。（173上／9）

⊕ 95 郡上藩鈴木と総代らの会話（の一部）。（173下／175上／55）

⊕ 96 鈴木の言葉。（175上／6）

⊕ 97 鈴木と屋貝の会話。（177上／16）

□ 17 鈴木の様子。（184／4）

⊕ 98 鈴木と総代らの会話（の一部）。（178上／180下／91）

□ 18 鈴木と総代らの会話。（185／186／18）

一七

【40】総代ら、一旦郡中会所に戻り人々と相談。

⊕ 99 屋貝も連れ、郡中会所へ向かう。（181上／8）

⊕ 100 総代ら、鈴木のお達書を披露。（181上／182上／23）

⊕ 101 村役人らの会話（の一部）。（182上／183下／57）

⊕ 102 村役人らの立場と決意。（183下／185上／47）

【41】相談の結果やはり辞退に決定し、再び鈴木のもとへ行きその旨を告げる。

⊕ 103 屋貝、村役人らの会話。（185上／187上／69）

□ 19 村役人らの会話。（186／188／22）

⊕ 104 鈴木の言葉。（188上／下／20）

□ 20 鈴木と総代らの会話。（189／190／13）

【42】人々、辞退を評価し郡上藩への反発を強める。

⊕ 105 人々、総代らの対処を評価。（188下／189上／21）

□ 21 再度返答するという鈴木との約束を反故に。（190／6）

⊕ 106 鈴木が新しく城を築こうとしているとのうわさに反発する人々。

（189下／191上／71）

一八

【43】竹沢、町年寄矢島善左衛門に郡上藩のことを語る。

- ⊕ 107 屋貝、町年寄矢島善左衛門に会い、鈴木との交渉のあらましを伝える。(191下／9)

⊕ 108 竹沢と矢島の会話(の一部)。(192上／8)

⊕ 109 竹沢と矢島の会話(の一部)。(192上／193上／15)

⊖ 22 竹沢の考え。(192／193／9)

⊕ 110 竹沢の言葉(の一部)。(193下／11)

⊕ 111 竹沢と矢島の会話(の一部)。(195上／9)

⊕ 112 竹沢の考え。(195下／14)

【44】矢島、帰り道に川上屋善右衛門に出会い、また合羽屋のおらくとすれちがう。

⊕ 113 タコあげをする子供たち。(196上／下／9)

⊕ 114 川上屋善右衛門の言葉(の一部)。(197下／198上／12)

⊖ 23 あたりの様子。(197／198／7)

⊖ 24 おらくの美しさについて。(198／199／5)

⊕ 115 おらく一家の暮らしについて。(199下／11)

⊖ 25 善右衛門の言葉(の一部)。(200／3)

⊕ 116 善右衛門の言葉。(200上／下／26)

一九

【45】竹沢、中呂村久蔵に郡上藩のことを語る。

⊕ 117 中呂村久蔵について。(202上／下／16)

⊕ 118 竹沢と久蔵の会談。(203上／204上／47)

【46】町会所と郡中会所が相談の上、郡上藩の件で嘆願書を作成。

⊕ 119 矢島の報告。(204下／11)

⊖ 26 郡上藩の飛騨横領の野心に反発。(203／7)

⊕ 120 久蔵の態度と見解。(204下／205上／18)

⊕ 121 久蔵の様子。(206上／下／8)

⊕ 122 宮ノ前村久兵衛の言葉。(207上／4)

⊕ 123 願書の内容。(207上／下／10)

⊕ 124 竹沢への不満を語る一部の人々。(207下／210上／87)

△ 16

⊕ 125 総代らの感慨。(210下／7)

【47】町会所・郡中会所総代、竹沢に嘆願書を提出。

【48】町会所・郡中会所・地役人、天朝直支配を総督府へ嘆願することを決定。

二〇

【49】(二月七日)竹沢、天朝御領を宣言。

⊕ 126 旧幕勢力の打倒に全力をあげる新政府。(213下／7)

⊖ 27 竹沢の考慮。(210／4)

【50】竹沢、年貢半減その他運上等の軽減を約束。

⊕ 127 人々の会話(の一部)。(218上／11)

二一

【51】藁つかい小屋に集まった村の若者たち。

【52】広瀬村五郎作、藁つかい小屋に寄り夜ばい話に興じる若者に年貢半減を伝える。

伝える。

⊕ 128 広瀬村五郎作の言葉。(226上／下／8)

【53】勘助を中心に世を語り合う若者たち。

⊕ 129 若者たちの会話(の一部)。(229上／下／17)

⊕ 130 勘助の言葉。(230下／11)

⊕ 131 若者たちの会話(の一部)。(233上／234下／40)

⊕ 132 源七の言葉。(234下／235上／7)

二二

【54】五郎作が通夜の席で年貢半減を聞いたこと。

⊕ 133 五郎作、通夜のごちそうを包み持つ。(238下／239上／8)

【55】五郎作、家に帰り女房のおしずくに年貢半減のことを伝える。

⊕ 134 五郎作とおしずくの会話(の一部)。(241上／242上／28)



④ 135 五郎作の言葉。（243上／5）

二三

【56】五郎作、夜ばいに来た若者を発見。

④ 136 夜ばいに来た若者の様子。（247下／10）

④ 137 五郎作と若者の会話（の一部）。（248上／下／13）

【57】若者と年貢半減を話題に酒を飲むところに息子が帰宅。

④ 138 五郎作と若者清兵衛の会話（の一部）。（249下／250上／10）

④ 139 五郎作と清兵衛の会話（の一部）。（250下／11）

④ 140 五郎作と清兵衛の会話（の一部）。（251上／8）

④ 141 五郎作、酒を用意し清兵衛にも勧める。（252下／18）

④ 142 五郎作と清兵衛の会話（の一部）。（253下／255下／75）

二四

【58】（二月八日）郡上藩鈴木、竹沢に不満を述べ対立。

④ 143 竹沢の考え。（258下／9）

④ 144 陣屋の様子。（259上／260下／10）

④ 145 面会場所へ進む鈴木。（259下／9）

④ 146 鈴木を待ち受ける竹沢。（260上／5）

△ 17 竹沢の言葉（の一部）。（261上／7）

④ 147 竹沢と鈴木（の一部）。（261上／7）

④ 148 竹沢と鈴木の会話（の一部）。（262上／12）

④ 149 竹沢と鈴木の会話（の一部）。（262下／12）

△ 18 竹沢と鈴木の会話（の一部）。（263下／6）

④ 150 竹沢と鈴木の会話（の一部）。（264上／下／14）

④ 151 竹沢と鈴木の会話（の一部）。（265下／266上／22）

【59】鈴木、総督府へ出向くことを決意。

④ 152 竹沢に激怒する鈴木。（267下／268上／9）

二五

【60】（二月九日）郡上藩排除を期して竹沢総督府本陣へ向かう。

④ 154 反郡上藩は飛驒の人々の総意であること。（269下／10）

④ 155 鈴木一人が総督府に向かったことを不安に思う人々。（270上／7）

④ 156 竹沢の感慨。（271下／272上／21）

【61】竹沢のあとを追いつ、続々と大垣へ向かう人々。

【62】火事の半鐘に戦と早合点する郡上兵。

④ 157 警戒を強める郡上藩。（276下／5）

二六

【63】畳屋の佐吉、郡上藩の侍に因縁をつけ対立。

④ 158 畳屋佐吉の言葉（の一部）。（280下／7）

④ 159 火方たちの罵声。（281上／10）

七

【64】お光姉妹のいるうどん屋へ通う郡上兵。

【65】お光姉妹の家に郡上兵がいるとの情報を聞き、踏み込む火方たち。

④ 160 火方たちの会話（の一部）。（286下／6）

④ 161 火方の増造、吉太郎に見張りを指示。（286下／287上／19）

④ 162 お光姉妹の家へ向かう火方たち。（287下／288上／8）

④ 163 吉太郎と増造の会話。（288上／下／9）

□ 28 うどん屋の主婦と火方たちの会話（の一部）。（290／291／12）

④ 164 人々のやじ。（294上／下／7）

二八

【66】甲村源兵衛を中心とした百姓たち、大挙して大垣へ向かう。

【67】大垣へ向かう百姓たちの道中。

△ 19

□ 29 百姓たちの会話。（298／8）

④ 165 大垣へ向かう百姓たちの様子。（301上／下／24）

④ 166 牛方源兵衛の行動。（302上／303下／52）

【68】百姓たち、国境を越えて大垣に迫る。

二九

【69】(三月十三日)郡中会所総代、竹沢と相談の上嘆願のために総督府へ。

① 171 宿の部屋の様子。(309下／7)

② 172 郡中会所総代と竹沢の会話(の一部)。(310上／6)

③ 173 総代らの危惧。(311上／10)

【70】総代、参謀宇田栗園に嘆願。

④ 174 市次郎の言葉(の一部)。(315下／316上／18)

【71】総代、竹沢に報告。

⑤ 175 総代らの会話(の一部)。(316下／8)

⑥ 176 総代ら、宿に帰りことの次第を報告。(317上／318下／47)

三〇

【72】郡中会所での百姓たちのおしやべりと謎かけ。

⑦ 177 村役人不在のなか、気がねなくふるまう百姓たち。(319下／320上／8)

⑧ 178 追いすがり願いの人々が多く戻って来たことが話題になる。(320上／6)

⑨ 179 新宮村勝次について。(321上／下／9)

⑩ 180 勝次の言葉(の一部)。(322上／9)

⑪ 181 百姓たちの会話(の一部)。(326下／327下／43)

⑫ 182 百姓たちの会話(の一部)と歌。(322／323／12)

⑬ 183 郡中会所総代、再度の嘆願に総督府に行くが、そこで郡上藩お預けを言

い渡される。

三一

① 182 総督府本陣の動静。(328上／下／5)

② 183 総代らの迷い。(328下／5)

③ 184 総代らの会話(の一部)。(229下／230上／18)

④ 185 総代らの気持ち。(330下／6)

⑤ 186 総代らの様子。(325／326／7)

⑥ 187 総代、竹沢に報告

⑦ 188 総代ら、宿にいる他の人々と相談。(333上／下／8)

⑧ 189 総代らの情報分析。(329／330／11)

⑨ 190 情勢を高山に伝えるため人を送ることにする。(334上／335上／38)

⑩ 191 急遽飛驒取締役を仰せつかった旨、総代に報告。

⑪ 192 その後の総代らの行動。(335上／337下／77)

⑫ 193 総代らと竹沢の会話。(338上／8)

⑬ 194 総代ら、ひそかに京都へ向け出発。(340上／13)

三一

【76】(三月十八日)郡上藩退去し、数日後竹沢、脇田頼三をともし帰陣。

① 191 力を誇示し引きあげる郡上兵。(341上／6)

② 192 竹沢の行なった政策と、山に臨んでの竹沢の感慨。

③ 193 年貢半減が人々の最大の関心であったこと。(343下／344上／13)

④ 194 年貢半減は政府の方針ではなかったこと。(337／4)

⑤ 20 ある人物の言葉。(344下／6)

⑥ 194 竹沢、そうぎの森へ行く途中、国分寺に立ち寄る。(346上／下／21)

⑦ 195 竹沢、そうぎの森へ参拝。(339／5)

⑧ 196 そうぎの森に着いた竹沢、本尊が仏像であることに驚く。

⑨ 36 竹沢の空想。(342／4)

⑩ 196 竹沢を見守る供の人々。(349下／5)

⑪ 36 竹沢を見守る供の人々。(349下／5)



この一覧には少々難点がある。述べたように、これは理論社版をもとにしたものである。したがって、△、⊕、□で示した変更箇所はあくまでも理論社版の単位におけるものであり、冬芽書房版の単位とは当然ずれがあることである。⊕の新たに加えられた部分はむろん理論社版で加えられたものであるから、すべて理論社版の単位に合致する。だが、□の省かれた部分は冬芽書房版の省かれたものであるから、理論社版の単位とはずれている部分があるのである。△の構成の変更も理論社版に合わせたもので同様なことが起こる。そのずれは、前稿において掲げた対照表を見れば明確になる。重複になるので本稿では再掲することはないが、適宜冬芽書房版の単位番号をも示すことにする。示さない場合は同一番号である。冬芽書房版の単位番号は前項と同様へ付けて記す。

## 二

一覧を見ればわかるように、第三の改稿における単位内の変更は極めて多い。第二の改稿における第一部の変更は合わせて一〇〇あまりあったが、その二・五倍の二五〇に達しており、それは第二の改稿全体とほぼ同数にあたる。ちなみにいえば、第一の改稿における第一部の変更は五〇あまりしかなく、全体でも一六〇ほどしかなかった。ただし、第一の改稿では初稿にはなかった第三部が加えられており、変更箇所として数えたのはそれを除く第一部と第二部に限られる。変更のなかでも圧倒的に多いのが新たに加えられた部分であることはいうまでもないが、それは第一、第二の改稿においても同様である。また、単位レベルでの変更においてもそれは同様であった。要するに、この作品は改稿のたびにその量を増やしており、第三の改稿においてそれは著しいと言えるのである。これまた第一の改稿における第三部を除けばであるが。理論社版第一部の巻末にある「定稿山の民の出版について」において小宮山量平は、「旧稿は、およそ千三百枚の力作でしたが、この定稿は、ほとんどそれに倍する二千五百枚におよぶ大作と

なりました。」と記している。いうまでもなく、「旧稿」とは冬芽書房版、「定稿」とは理論社版のことであるが、ここで述べられている数字には疑問がある。印刷されたものの単純な字数と行数で計算する限り、冬芽書房版は一八〇〇枚で、理論社版は二四〇〇枚であった。小宮山がどのように計算したのかはわからないが、理論社版における一〇〇枚の差は考えづらく、冬芽書房版における五〇〇枚の差はあり得ないであろう。小宮山の計算によれば一・九倍になり、ほぼ「倍する」量というのは誇張ではない。だが、一八〇〇枚と二四〇〇枚であれば一・三倍であり、明らかに誇張、というよりははつきりとあやまりというべきであろう。

各版本本文の枚数に関しては、実は他にも不審な発言がある。冬芽書房版を収録した春秋社版（86・11）の「後記」を記している天児直美である。天児は『山の民』の出版状況を収録版等も含めてまとめている。本論の第一回においては、それをもとにして若干の欠を補い、かつ少々修正したものを示しておいた。その際にも少し触れたが、天児は冬芽書房版を二五〇〇枚、理論社版を二五〇〇枚と記していた。先の小宮山と理論社版は一致しているが、冬芽書房版では二〇〇枚の差がある。ちなみにいえば、天児は学会版の枚数も記しており、一〇〇〇枚としている。先と同様な方法で計算すると、学会版は一四〇〇枚で、ここでも四〇〇枚の差が生じることになる。小宮山は、学会版の枚数については記していない。なお、付け加えていっておけば、初稿（雑誌『ひだびと』掲載）は六〇〇枚であり、これについては天児も記していない。

小宮山と天児は、いずれも実際の原稿を手に行っていた可能性はおおいにあったといえるであろう。小宮山は理論社版の発行者であり、天児は江馬晩年の十年あまりのあいだ親しく付き合ひ、死の数年前からは同棲するというあいだがらだったからである。したがって、実際の原稿を数えたのかも知れない。だが、仮にそうであったとしても、先のような差が生じるとは到底考えられないのである。試みに、冬芽書房版を収録した春秋社版で計算してみると、冬芽書房版とは十三枚の差しか生じなかった。また、理論社版をほぼそのまま収録したといえる北溟社版（江馬修作品集『第一巻及び第二巻、73・3』）で計算してみても、理論社版とはやはり十六枚の差しかなかった。むろん、これらと原稿の場合とはまた異なる

であろうが、やはり先のような差が生じるとは考えられないのである。数えまちがえ以外の考え得るケースとしてはたぶん二つある。ひとつは、四〇〇字詰原稿用紙ではなかったことである。だが、記述量を表わす際には特に断わらない限り四〇〇字詰というのが常識であることはいまでもなく、少々考えづらいケースというほかはない。もうひとつは、清書原稿ではなかったことである。だが、これもまた四〇〇枚、五〇〇枚という差を、しかもそれらの枚数を下まわる差を生むとはやはり考えづらいのである。

以下、やや大部になるが第三の改稿における単位内の変更を検討する。以前と同様、構成の変更、新たに加えられた部分、省かれた部分の順に見ていく。

まずは構成の変更である。△1は【1】のはじめの部分、すなわち作品がはじまつてすぐの部分である。慶応四年正月二十三日の真夜中、たいまつを先に立てた一挺の早駕籠が高山の町に乗り込んで来るというところからこの作品ははじまる。早駕籠が軋りゆれる音、担ぐ人の足音とかけ声や息づかいといったことが記されたあとに、理論社版ではけたたましく泣きだす赤ん坊や急に起きだして駕籠を見送る者等が描かれていた。それに続けて、先導のたいまつがうず高く積った雪を照らし出し、氷柱の列がきらきらと赤く照らし返す様などが描かれていた。冬芽書房版ではそのたいまつに関する記述が、泣く赤ん坊や見送る者等の記述の前にあった。冬芽書房版では、先導のたいまつの中を含むいわば駕籠に関する記述がまとめて記されているといえるわけで、それで何ら問題はないであろう。だが、そこに赤ん坊や見送る者等の人々の様子が割って入る形の理論社版も特にまずいというわけではなく、大きなちがいはないというほかはないであろう。

△2は【4】、冬芽書房版では(3)の部分である。冒頭に登場した駕籠に乗っていたのは手代の寺田潤之助であった。寺田は、郡代役所に到着するとすぐに郡代新見内膳に情勢報告をした。それを聞いた新見は、深夜にもかかわらず役人たちを呼び評定を開くことにする。冒頭には、すでに評定がはじまり、元締や手代をはじめとして地役人を含む役人たちが集まったことが記される。それに続けて、役人たちのうち沈んだ様子や郡代のうつろで頼りない様子などが描かれ、そのあとに次のような記述があった。

いくつかの燭台には、太いろうそくがしずかにもえていたし、あちこちの真鍮の大火鉢には、炭火があか／＼とおこっていた。しかし深夜の寒気はかわらず人々の背すじや膝にきびしく感じられた。

以上が冬芽書房版であるが、理論社版では引用部分の記述が役人たちや郡代の様子を記した部分の前に移されていた。これまた大きなちがいはないというほかはない。

△3も同じく【4】、冬芽書房版(3)の部分にある。評定がはじまり、鎮撫使先発隊に郡代役所を明け渡すか否かの議論が戦わされる。徹底抗戦を主張する元締の浅井豊助に対して、手代の近藤英一郎が反論する。徳川の恩はむろん忘れたこととはなく、幕府のためには一命を差しあげる覚悟があることを述べたあとに、理論社版では、現状は時勢の力によるものであり人力ではいかんともし難いことを主張する。それは、江戸にいた時分から多少は外国の事情を学び、達識の士とも交際したことなどから得た認識であるとも述べられていた。冬芽書房版では、この現状認識に関する発言は少しあとにある近藤の発言のなかにあった。近藤の発言に浅井はいきりたち、郡代が双方をたしなめるといった記述があったあとに近藤は再び発言し、そこで先のような認識を述べていたのである。郡代にたしなめられることによって、再度冷静になり現状認識を述べる形になっているといえる。冬芽書房版の方がよりよいともいえるが、理論社版の方が劣るとまではいえないであろう。なお、冬芽書房版では、発言者は近藤英一郎ではなく同じ手代の大沢謙介となっていた。大沢も近藤と同じ考えを持っていた者であったが、理論社版においてなぜ変えられたのかはわからない。

△4は【9】、冬芽書房版では(7)の部分である。ここは、鎮撫使先発隊がやって来ることを聞きつけた人々の混乱が、主として会話で描かれている部分であるが、理論社版ではある部分の会話が少し前に移されていた。展開上特に前に移す必要は認められず、その意図は不明である。

△5は【15】、冬芽書房版では(13)の部分である。ここは、郡中会所の二階で村

役人らが対郡上藩対策についての寄り合いをしている場面である。大沼村の名主久左衛門の発言があり、そのあとに久左衛門という人物に関するやや詳しい説明がなされているのが理論社版であったが、冬芽書房版ではそれが逆になっていた。どちらでもかまわないというほかはない。

△6は【20】、冬芽書房版では（18）の部分である。郡代役所の明け渡しが決まり、新見郡代は江戸に逃れることとなった。出発の夜、新見が腹ごしらえにかかったことが記される。理論社版ではそれにすぐ続けて、何の馳走もなかったが頭つきの焼き魚がついていたことと、近在から奉公にあがっていた十六、七の娘が給仕をしていたことが記されていた。冬芽書房版では、新見が腹ごしらえにかかろうとしていたそのときとして、手代大沢が、郡中会所総代らが郷蔵に関する願書を持参して来たことを知らせに来たことが記されていた。新見は百姓どものよいようにしてやれといい、それで終わっているのだが、そのあとに先の頭つき焼き魚と娘の給仕の記述があつたのである。これもまた大きなちがいはないというしかない。

△7は【22】、冬芽書房版では（20）の部分である。【22】から【24】までは、牛方の親子が中心となり展開される部分である。はじめに、四頭の牛をひき連れて牛方親子が宮峠を登っていく様子がかなり細かに描写されているのだが、その途中で太陽に関する記述が挿入されていた。雲の切れ間からときたま日光がもれ雪の面にまぶしく照りはえる。と思うとまたたく間に空は雲におおわれひらひらと雪が舞い落ちる。それでも太陽は隠れ切らず、おぼろ月のように雲のなかにぼんやりと所在を示している、といったなかなか美しい描写である。理論社版ではそれがやや前の部分に移されていた。これもまた、どちらでもかまわないというほかはなく、その意図はよくわからない。

△8は【26】、冬芽書房版では（24）の部分である。ここは、郡上藩がついに入国し、それを知った人々が反発を強める様子が描かれている部分である。この部分でやや特徴的といえる記述は、人々の強い反発のあらわれとして土塀や板壁に書かれた落首が記されていたことである。

名にし負う高山さしてせめのぼる人の顔さえ青山に見ゆ

吞まずとも酒に酔うたか赤鞘の道はかどらぬ郡上の人々

打出した時の太鼓に恐れけり名も青山の木の葉武士かな

冬芽書房版ではこれらの落首は最後の部分におかれていたが、理論社版ではやや前に移されていた。冬芽書房版はそれらの落首でその章が終わる形になっており、いわば余韻を残すような記述になっていたといえなくもない。

△9は【27】、冬芽書房版では（26）のはじめの部分である。郡上藩に続いて竹沢寛三郎率いる鎮撫使先発隊がいよいよやって来る。冒頭、隣国美濃の神淵までやって来たときに、地役人の田近孫蔵と上村木曾右衛門の二人が出迎えに行ったことが記される。ただし、のちに検討することになるが、理論社版では冒頭新たに加えられた記述があるので正確には冒頭ではない。それはさておき、それに続けて竹沢が、はじめて郡代が朝廷に帰伏する意思であることを知ったことが記される。そのあとに、村役人の角川村徳兵衛も来ていたことが記される。徳兵衛ははじめ地役人の代理として来ていたのだが、あとから地役人の田近と上村がやって来たので、飛驒百姓総代として竹沢に面会したと記されていた。以上が冬芽書房版であるが、理論社版では地役人の二人が出迎えに行った記述のあとに徳兵衛の記述が置かれていた。おそらくは、出迎えの人々の記述をまとめようとしたのであるう。

△10と△11のふたつはからみ合っているのでまとめて扱う。いずれも【28】、冬芽書房版では（26）の部分である。冒頭、竹沢が下原の番所を越えて飛驒の国に入ることが記されるが、冬芽書房版におけるそのあとの記述をごく簡単に整理すれば次のようになる。

- A 先発隊進軍の様子。
- B 山深いあたりの様子。
- C 益田川に沿ってさかのぼる先発隊。



D 益田川上流の小坂郷、阿多野郷について。

冬芽書房版ではこのような順で記されているのだが、理論社版ではそれがC、B、D、Aの順に改められているのである。すなわちCの頭への移動とAの尻への移動であり、便宜的に前者を△10、後者を△11とした。理論社版では、益田川に沿ってさかのぼる先発隊の次に山深いあたりの様子が記され、そのあとに小坂郷、阿多野郷についての記述があり、最後に先発隊が進軍する様子が描かれていたのである。ただし、理論社版では新たに加えられた記述があり、BとDのあいだ、DとAのあいだ、加えていえばAのあとにもある。新たに加えられた記述はのちに検討するが、結局のところ理論社版はC、B、⊕68、D、⊕69、A、⊕70の順になる。なお、理論社版では益田川はひだ川となっていたが、同じ川である。現在の地図にも、「飛驒川」、括弧して「益田川」となっているものがある。冬芽書房版では、益田川に沿ってさかのぼる先発隊の記述にすぐ続けて、その上流にある小坂郷、阿多野郷について記すという点でスムーズな流れになっていたといえる。ここでことさらに小坂郷と阿多野郷について記されているのは、幕府の御用木元伐場として有名であっただけではなく、のちに民衆蜂起の中心的な役割を担う地域だったからである。理論社版には記されていなかったが、冬芽書房版ではこの部分に、「この山民はあとでひだの維新の歴史に重大な役割を演ずるのである。」と記されていた。理論社版では、それらの連続したといえる記述が分断されたわけだが、だからといって構成上特におかしくなったわけではない。どちらもそれなりの構成であったというほかはないのである。A、B、C、Dとまとめたその内容からすれば、極端にいつてどの順番に並べても成立し得るといつてよいであろう。念のためにいつておけば、新たに加えられた記述がその順番変更に関与していたとは認められない。これまでに見てきたところにも実は新たに加えられた記述がいくつかあったのだが、それもまた同様に関与的であったとは認められなかった。

△12は【30】、冬芽書房版では(28)の部分である。人々が郡上藩の入国に強く反発するなか、手代の近藤英一郎は郡上藩退去を訴えに竹沢のもとに向かう。近藤は先の評定の際に役所の明け渡しを主張した人物である。近藤の訴えに竹沢も同

意を示し、さらに直接郡上藩に願い出ることを勧める。近藤は郡上藩家老鈴木兵左衛門のもとへ行き、幸い郡上藩の一部退去の約束をとりつけることに成功するのである。ただし、それにはひとつの条件があった。退去の際に人々が悪口や雑言を放つような無礼なふるまいをしないようにというのであった。もしあれば、容赦なく切り殺し、場合によっては鉄砲を打ち放すというのである。幸いその条件は守られ郡上藩の一部が無事退去したという記述がそれに続く。理論社版ではこの条件に関する記述のあとに、郡上藩の陰口をいい合う人々の会話が描かれていた。冬芽書房版ではそれらが逆になっていたのである。大きなちがいはないといえるが、郡上藩退去のあとに、無礼なふるまいを禁じられた人々がそつと陰口をささやき合うという理論社版の方がよりよいということもできるであろう。

△13は【35】、冬芽書房版では(32)の部分である。ここは、郡中会所の人々が竹沢を礼賛する様子が記されている部分である。そのなかに次のような記述があった。

彼らはこの新しい支配者の中に、力と威厳を見ただけでなく、彼がもたらした革新的な空気をおとして、「幕府の苛政を廃し、万民を塗炭の苦から救おう」とするもの、——維新の使者のすがたを見てとつたのである。

これは冬芽書房版の記述であるが、この部分が理論社版ではややうしろに移されていた。冬芽書房版ではこの記述のあとに、「あのお方はたゞの殿様ではない。神様じやぞ」というある人物の言葉に対して、「いよ／＼ありがたい御時世がきたぞ。これからは年貢もいつそ軽くなろうし、くらしもだん／＼ラクになるじやろ。何にしても、もうちつとの辛抱じやぞ」と答えるだけの短い会話の記述があった。理論社版ではその会話のあとに移されていたのである。ただし、理論社版ではここにも新たに加えられた記述が数箇所あった。いずれも竹沢を礼賛する人々の会話を中心とした記述であり、結果としてはこれら会話の記述部分のなかばに位置していたのである。もちろん、先の会話部分よりはあとにである。これまた大きなちがいはないというほかはないが、理論社版ではやや長く続く会話の記述に一

呼吸入れるような効果はあったといつてよいであろう。

△14と△15はいずれも【37】、冬芽書房版では（33）の部分にある。ここは、郡上藩の家老鈴木から呼び出しを受けた郡中会所の総代が、鈴木のもとへ向かうその途中が描かれている部分である。冒頭、「ああ、春らしいなつたわい」とあたりを見まわす久左衛門が描かれ、そのあとにまさしく春らしくなつたあたりの様子が記されているのが理論社版であった。冬芽書房版ではそれが逆になっている。ただし冬芽書房版では、冒頭の人物は久左衛門ではなく、町年寄の屋貝権四郎になっていた。理論社版では、このあとで屋貝は郡中会所総代らと合流することになるが、冬芽書房版でははじめからいっしょである。久左衛門は、△5の変更の部分でも登場した大沼村の名主である。そのときにも久左衛門の発言とその人物に関する発言が逆になっていたが、それとちょうど同じような変更である。理論社版では、この部分は章のはじめになっており、いきなり人物の発言ではじめようという意図があったと考えられなくもないが、大きなちがいはないというべきであろう。以上が△14である。

鈴木のもとへ行く途中、郡中会所総代らは鍛冶橋の擬宝珠に張り紙がしてあるのを発見する。そこに書かれていたことが引用という形で記されたあとに、それを見た総代らの様子や気持ち等が記されていた。そこに書かれていたのは、総代に対する訴えであった。やがて甲村の孫助が口火を切り孫助の発言が記されたあと、当時の名主は百姓たちの印形を手元にあずかり、必要の場合には自由に使用していたことが記される。張り紙に書かれていたのは、それをやめるようにという訴えだったのである。以上が冬芽書房版であるが、理論社版では張り紙を見た総代らの様子や気持ち等の記述が、最後の部分に移されていた。冬芽書房版が特に不都合とは認められないが、理論社版もまづいわけではなく、どちらでもかまわないというほかはない。なお、理論社では鍛冶橋は代官橋に、擬宝珠は欄干になっている。以上が△15である。

△16は【46】から【47】にかけて、冬芽書房版では（40）の部分である。理論社版では二つの単位にまたがっているが、冬芽書房では単位内の変更になるので、前稿では扱わなかった。そこでの変更とは、当然のことながら冬芽書房版の単位が変

更される場合だったからである。本稿のはじめに掲げた一覧には、△16は便宜的に【46】の部分に記しておいた。さて、△12の部分でも見たように、手代近藤の尽力もあり郡上藩の一部は退去したが、まだ多くの郡上兵は飛驒にとどまっていた。郡上藩の排除は飛驒の人々の総意であったことはいうまでもない。そこで、町会所と郡中会所は相談の上、郡上藩排除についての嘆願書を提出することにした。【46】は、町会所と郡中会所のそれぞれが嘆願書を作成するまでが描かれていた。次の【47】は、次の朝早く嘆願書を提出するために役所へ出かけたという記述からはじまるのだが、冬芽書房版ではその記述のあとに嘆願書が引用されていたのである。嘆願書作成までが描かれている【46】の最後に記す方がオーソドックスな方法といえるであろうが、冬芽書房版が特にまづいというわけではない。

△17と△18はいずれも【58】、冬芽書房では（51）の部分である。飛驒高山に入つた竹沢は、間もなく天朝御領を宣言し、合わせて年貢半減とその他運上等の軽減を約束する。このことが、のちに竹沢失脚の大きな要因になるのだが、それはさておき、おもしろくないのは郡上藩である。郡上藩もまた勅命によって出向したということでは竹沢ら鎮撫使先発隊と同様であり、武力という点ではむしろまさっているにもかかわらず、郡上藩には何の相談もなかったからである。そこで、郡上藩家老の鈴木は竹沢のもとへ抗議に出向く。一応の形式的な挨拶を済ませたあと、鈴木は発言する。当方にあらかじめ何の相談もないことは極めて遺憾であり、また布令や高札を出す際には藩主青山峰之助の名を併記すべきであるというのが鈴木的主張である。冬芽書房版ではひとつづきのその発言が、理論社版では前後二つに分けられ、後半は次に記される鈴木の様子と竹沢の様子が描かれている部分のあとに移されていた。これまた大きなちがいはないといわざるを得ない。以上が△17だが、△18も同様、鈴木の発言の移動である。竹沢は、布令や高札に郡上藩主の名を出さなかったのはある配慮によるものだと述べる。すなわち、出せばかえって郡上藩を嫌う飛驒の人々の反発をまねき、鎮撫の実効が立たないというのである。それに対して鈴木は、人々が郡上藩を嫌っているというのはあて推量であろうと反発するが、竹沢はその証拠として郡中会所や町会所、あるいは地役人から提出された願書を提示する。だが、それでも納得しない鈴木は、無

知蒙昧な人々のいうなりになることが鎮撫ではなく、よろずわれわれと相談の上  
 ことにあたるべきであることを主張する。それに対して竹沢は、鎮撫使先発隊と  
 して出発する際には、何でも郡上藩と相談せよという指図は受けていないと態度  
 を硬化させるのである。以上が理論社版であるが、冬芽書房版では最後の部分、  
 鈴木的主張は竹沢の発言のあとにあった。理論社版の方が自然な流れのように思  
 われる。だが、冬芽書房版がおかしいというわけではない。願書を見せても納得  
 しない鈴木に早くも硬化した竹沢が先のように発言し、それに対して鈴木が、か  
 といってわれわれを無視して差しつかえないという法はないであろうという展開  
 になっていたからである。

△19は【67】から【68】にかけて、冬芽書房版では(59)の部分である。△16の場合  
 と同様、理論社版では二つの単位にまたがっているが、冬芽書房版では単位内の  
 変更になるのでここで扱う。一覧には、△19は便宜的に【67】の部分に記してい  
 たことも先と同様である。ここは、国境を越えて美濃に入り大垣へと迫るまでの  
 百姓たちの道中が描かれている部分である。冬芽書房版では冒頭、国境を越えて  
 美濃に入ったときのあたりの様子が記されていた。雪はどこにも見あたらず、路  
 傍にはふきのとうが芽を出しところどころ梅の花が咲いていること、農家は板壁  
 ではなく土壁を多く用いていること、麦が青々とのび菜の花は咲き乱れひばりが  
 さえずっていること等々。まだ雪深い飛騨とは異なるそれらの様子がそこには記  
 されている。この部分が、理論社版では【68】の頭に移されていた。これは、あ  
 りの様子の記述が単にうしろにまわされたということだけではない。国境を越え  
 て美濃に入ったことをもややあとへとまわされたことをも意味している。すなわ  
 ち、理論社版の【67】はまだ美濃に入る前の記述になっているのである。この部分  
 のすぐ前の【66】は、甲村源兵衛を中心とした百姓たちが大垣へ向かう様子が描か  
 れていたが、【67】はいわばその続きという形になっていたといつてよい。美濃入  
 国を少々あとにずらしたことで特に展開上の変化があるわけではなく、どちらで  
 も構わないというほかはないであろう。

△20は【73】、冬芽書房版では(62)の部分である。総督府への嘆願のために大垣  
 へ向かった郡中会所総代らは、首尾よく参謀の宇田栗園との面会に成功する。嘆

願の主旨はよくわかったが、多忙の折柄でありかつ太政官への問い合わせも必要  
 であるから、しばし猶予をということであった。その翌日、宿屋のひと間に集まっ  
 た総代らを描くことからこの部分ははじまる。総代らは、近々宇田が大垣を去る  
 という情報を得、当惑する。前日の宇田との面会に好感触を持った総代らはすつ  
 かり頼みにし、宇田がいる限り願いは達せられると思ひ込んでいたからである。  
 そのようなことが記されたあとに、理論社版では次のようなことが記されていた。  
 飛騨の人々の願いは一地方の小さな問題であり、新政府としてはそのような小事  
 に関わっている暇はないであろうこと、そしてそのことは総代らも察していたと  
 いった記述である。冬芽書房版ではそれらの記述が逆になっていた。ここは要す  
 るに、飛騨という一地方の小事に関わっている暇はないと理解しつつも、宇田を  
 頼りに望みを捨てない、あるいは希望的観測を続けていたということであり、そ  
 の意味では冬芽書房版の方が素直な書き方であったとはいえるであろう。だが、  
 理論社版の方がまずいというわけではない。総代らは望みが薄  
 いと知りつつも希望を捨てなかったわけだが、それは宇田がいる限りという条件  
 付きであった。その宇田が去ると聞きつけ総代らは当惑し、宿屋のひと間でその  
 対策を立てようとしていたのである。

△21は【77】、冬芽書房版では(65)の部分である。ここは、竹沢が行なった種々  
 の政策が記されている部分である。竹沢は、すでに天朝御領を宣言し、年貢半減  
 とその他運上等の軽減を約束していたが、ここで最初に記されているのは運上の  
 廃止ないしは軽減である。日常生活に必須な商売及び他国からの米や塩の買入れ  
 の運上を廃止、蚕種の運上は軽減するというものである。冬芽書房版ではそれに  
 続けて、人別手当米や山方米等の救恤米制度の継続について記されていた。理論  
 社版ではその記述はややうしろに移され、そのあいだには、それらの政策を喜ぶ  
 人々が描かれていた。冬芽書房版ではその記述は、先の二つの政策が記されたあ  
 とにあったのである。二つの政策をまとめて記し、それを喜ぶ人々が描かれると  
 いう冬芽書房版の方がよりよいようにも見える。救恤米制度もまた喜ばしい政策  
 であったことはいうまでもない。だが、理論社版で変えたのにはおそらく理由が  
 あった。政策を喜ぶ人々が描かれている部分には、ある人物の次のような発言が



あつた。

「天朝さまは徳川なぞと違って、よつぽどお金もちじゃと見えるのう。でなけりや、お年貢を半分にへらいたり、だいじな運上をやめたりして、お台所がもちきれる筈が無いもん」

これは理論社版からの引用であるが、冬芽書房版でもほとんど同じ記述である。理論社版で救恤米制度の記述をあとに移したのは、ここで述べられているのが年貢と運上についてだけだからであつたと考えられる。もっとも、救恤米制度をも記したあとにこのような記述があつても特に不都合というわけではない。その意味ではやはり、どちらでもかまわなかつたといえるであろう。

以上が構成の変更である。容易に気づくように、見てきたもので明らかに改善といえるようなものはなかつた。比較的にやりましなと思われる、あるいは意図がわからなくもないといえるものがいくつかあつたくらいである。第一、第二の改稿においてはいずれも明らかな改善といえるものがあり、また少なくなかつた。しかもそれぞれの部においてそれはあつた。第三の改稿の第一部においてはじめてそのようなものがなくなつたといえる。いわば改稿のための改稿といつてもよいが、むしろそれが第三の改稿の特徴といつてよいかはこれから見ていく検討にゆだねたい。

次は、新たに加えられた部分である。新たに加えられた部分は極めて多い。構成の変更や省かれた部分に比べて圧倒的に多いというばかりではない。第一、第二の改稿における第一部のそれに比べても著しく多く、第一の改稿の五・六倍、第二の改稿の二・七倍の数にのぼる。これまでの検討では、まずは大雑把に分類することからはじめたが、ここでもひとまずそれを踏襲する。ただし、ここでの分類は以前に比べればあまり意味がないことをあらかじめ断わっておく必要がある。分類はそれなりの項の数と、各項を構成する要素のそれなりの数が求められることは言をまたない。その点からいって十分な分類にはなり得ないからである。ただ、これまでの検討においても必ずしも十分な分類になつていたわけではない。

とりわけ第二部の改稿においてそれはいえるが、今回の分類はさらにその程度がはなはだしいのである。これまではおおよそ四つに分類した。

#### 一 会話の記述。

#### 二 あたりの様子あるいは人々の様子の記述。

#### 三 ことがらに関する説明の記述。

#### 四 引用の記述。

箇条書きに並べると少々舌足らずない方があることは否めないが、それについてのはちに説明する。今回の分類では、ほぼそれらのうちの二の二つに分類できるにすぎない。しかも、そのほとんどは一の会話の記述であり、二ははるかに数が少ない。それだけではない。それらに分類したものの数は合わせて全体の六割に満たず、残りはその他とするしかないのである。もっとも、これまでの分類においてもすべてを分類できていたわけではないが、特に第二の改稿においては今回とそれほどへだたつていないわけではないのだが。

まずは会話の記述である。これまでは、そこに一人の発言の場合をも含めておいた。正確には発話というべきであるが、一応ひとまとめに会話の記述として扱った。ここでもそのことに変更はない。ただ、これまでと異なるのは一人の発言が少なくないことである。絶対数だけではなくその割合がはるかに多いのである。そこで、それらを分けて記しておきたい。まずは一人の発言である。③3、

⑤5、⑥6、⑧8、⑨9、⑪15、⑫26、⑬32、⑭48、⑮52、⑯55、⑰74、⑱76、⑲96、  
⑳104、㉑110、㉒114、㉓116、㉔122、㉕128、㉖130、㉗132、㉘135、㉙147、㉚158、㉛174、㉜180、  
㉝193の二十八箇所である。以下は、それ以外のまさに会話の記述である。⑦7、  
⑩10、⑪12、⑫13、⑬14、⑭17、⑮29、⑯31、⑰33、⑱34、⑲37、⑳38、㉑40、㉒41、  
㉓47、㉔51、㉕53、㉖57、㉗59、㉘60、㉙65、㉚71、㉛77、㉜78、㉝79、㉞81、㉟82、  
㊱83、㊲85、㊳88、㊴90、㊵92、㊶93、㊷94、㊸95、㊹97、㊺98、㊻101、㊼103、㊽108、  
㊾109、㊿111、㊰127、㊱129、㊲131、㊳134、㊴137、㊵138、㊶139、㊷140、㊸142、㊹148、㊺149、  
㊻150、㊼151、㊽152、㊾160、㊿163、㊰168、㊱169、㊲172、㊳175、㊴181、㊵184、㊶189の六十  
五箇所である。合わせて九十三箇所になる。

これらはむしろ一部地の文を含んでいるが、すべて会話を中心とした記述で

ある。これまでの新たに加えられた会話の記述にはひとつの特徴というべきものがあつた。その多くは新たな会話場面を創出するものではなく、もともとあつた会話の記述をいわばふくらませるような形で加えられたものであつたことである。一人の人物の会話も同様であり、会話場面での追加であつた。創出されたものがなかったわけではないが、もともと存在しない場面を創出した、あるいは既出場面に新たな人物を登場させたりといった創出ではなかった。すなわち、場面としては存在した人物も存在していた、ないしは当然存在していたと思われる人物による会話であつた。もともとあつた会話をふくらませるようなやり方には、会話場面をより豊かにしようという意図があつたと考えられるが、新たな会話場面の創出も、作品全体として会話場面を増やし、より豊かにしようという意図があつたといつてよいであろう。今回の改稿においても基本的にはそれは同じである。ただ、それだけではないと判断されるものもあり、それについてはのちに詳しく述べる。

次は種々の場面におけるあたりの様子の記述、さらには人々の様子の記述である。あたりの様子与人々の様子はむろん性質が異なるが、しばしばそれらは一体化して記されているのでまとめて取りあげた。①1、①2、①30、①36、①43、①46、①49、①50、①54、①56、①58、①68、①69、①70、①75、①86、①113、①121、①136、①144、①165、①171の二十二箇所である。これらの記述はおおむね一定の効果をあげていたといつてよい。

以上、ほぼこの二つに分類できるにすぎないのだが、三のことがらに関する説明の記述といえるものがひとつだけある。①39である。飛驒地方固有のというわけでは必ずしもないが、飛驒における制度、習慣、風俗等に関する説明である。小説を読み進める上で理解を助ける説明として有効であつたといえる。①39は郷蔵についての説明である。もうひとつ、四の引用の記述はなかった。これは、落首や唄や謎かけ、あるいは信書、手記、張札、声明文といったものの引用である。多くは前後一行あけて一字から数字分下げて記されている。引用といういい方が妥当かどうかは少々疑問が残るが、一応そう呼んでおいた。

以前と同様、これら以外のものを中心として特に問題となる部分をのちにまと

めて検討することにする。これまでの検討では、結果的には大方の部分を検討してきたが、今回は触れない部分も少なくない。数が多いということもあるが、構成の変更のところでも見てきたように、その意図がよくわからない、あるいはあまり意味があるとは思えないものが少なくないからである。その点で、新たに加えられた部分もまた構成の変更と同様な傾向を持っていたといつてよいであろう。なお、詳しい検討は省かれた部分をも一通り見たあとに合わせて行なう。新たに加えられた部分と省かれた部分とは互いに関連している場合が少なくないからである。

そこで、次に省かれた部分である。省かれた部分についてはこれまで、基本的に分類することはしなかった。むろん、そうすることにあまり意味がないと考えたからであるが、それは主として全体の数が少なかったことによる。やや多めの第一の改稿における第二部のみを分類したにすぎない。新たに追加された部分に比べ省かれた部分は圧倒的に少ないのである。第三の改稿においてもそれは同様だが、ここでは一応の分類を行ないたい。新たに加えられた部分に比べればはるかに少ないが、ある程度の数はあるからである。もともと、おおいに意味がある分類といえないことは先と同様である。

まずは会話の記述である。□2、□6、□7、□8、□9、□10、□15、□16、□18、□19、□20、□25、□28、□29、□30、□31の十六箇所である。新たに加えられた部分としては会話の記述が相当数を占め、作品全体として会話の記述及び会話場面を増し、より豊かにしようという意図があつたと述べたが、省かれた部分もわずかなでなかった。だが、その多くは差しかえといふべきものであつた。すなわち、省くかわりに新たな会話の記述を加えた、あるいは新たな記述を加えたがために省いたというものである。その意味で、会話の記述をことさらに削ろうという意図は認めがたく、全体としては会話の記述を増やしより豊かにしようという意図はやはり顕著であるといつてよいであろう。

次はあたりの様子あるいは人々の様子の記述である。□1、□3、□4、□17、□23の五箇所である。新たに加えられた部分にも様子の記述は少なくなかったが、これらは差しかえといえるものではなく、明らかに省かれたものである。

以上の二つに分類できるのみで、その数は合わせて全体の六割に満たないのは先と同様であり、残りはその他とするしかない。

### 三

これまでの検討では、変更箇所が比較的集中している部分からはじめ、あとで補足的に他の部分を取りあげたが、ここではその方法を取らない。比較的集中している部分がないというわけではない。だが、それを選ぶことにあまり意味があるとは思えないのである。変更箇所が極めて多くかつ全編に遍在し、比較的集中しているといえる箇所もまた多く存在するからである。そこで、基本的には順を追って見ていくことにする。くりかえしになるが、検討は特に問題となる部分に限り他の部分は割愛する。

はじめに【1】の部分である。△1についてはすでに触れたが、その前に□1がある。この作品は、「二八六八年（慶応四年）旧正月二十三日、まよ中。」という記述ではじまるが、冬芽書房版ではその次にあたりの様子が記されていた。雪深い高山の様子である。それが理論社版では省かれたのである。『山の民』の改稿過程に関する唯一の研究といつてよい『江馬修論』（おうふう、00・2）において永平和雄もその点に触れ、「なぜ削除されたのであろうか。」と疑問を呈している。この作品における自然描写の美しさをくりかえし指摘していた永平にとってはなおさらのこと、理解に苦しむものであつたであろう。永平は、「深夜の早駕籠から陣屋の評定までの、導入部の激しい事態の推移を伝えるには、自然描写は余計なものと考えたのであろうか。」と述べているが、永平もたぶん本気でそう考えていたわけではないであろう。永平ならずとも、この部分はやはり理解に苦しむのである。ちなみに、この付近にいけばそのかわりになるというべき記述の追加はなかった。さらに付け加えていっておけば、あたりの様子の記述の省略はこの部分のほかに一箇所あるのみである。

次は【4】、冬芽書房版では（3）の前半部分である。ここは、陣屋の大広間で行なわれた評定の場面である。まずは元締の浅井豊助が一同に情勢を報告する。冬

芽書房版では、「情勢をこま／＼と報告していた。」という記述があつただけであつたが、理論社版ではそのあとに、勅命により東山道鎮撫使が発向し、竹沢寛三郎率いる先発隊が飛驒に向かおうとしているとの情報を伝えたという記述が加えられている。それが④4である。そのことは、実はここではじめて記されていることではない。作品冒頭、駕籠に乗って登場した手代寺田潤之助によつてもたらされたこととしてそれ以前に記されているのである。理論社版ではいわずそれをくりかえした形になり、無駄な追加のようにも見える。だが、役人を集めての評定の場面であり、みなの前における改めての具体的な情勢報告の記述は、決して余計とはいえないであろう。評定では様々な議論が展開されるが、結果は鎮撫使先発隊に郡代役所を明け渡すというものであつた。ほぼそのような結論に達したころに、④11の新見郡代の考えが加えられている。郡代の本心は、当地から一刻も早く逃げ出すことであつたが、さすがにそのような卑怯なことを家来の前にさらすことはできなかったという記述である。冬芽書房版でも、ややあとの方に「その腹の中では脱走のことは初めからきまつていたのだ。」という記述はあつたが、それをやや詳しく記した形であり、然るべき追加であつたといつてよいであろう。残りの追加部分はすべて会話の記述なので割愛する。省略部分も三箇所あるが、これも会話と様子の記述である。いずれもごく短かい記述だが、なぜことさらに省かれなければならなかったのかはよくわからない。

【7】、冬芽書房版の（5）と（6）の前半部分はほぼ会話の記述であるが、④16については触れておく必要がある。ここは、地役人たちが集まり相談の結果、天朝への帰順を決定する場面である。議論の末に帰順の結論に至ったときに、富田稲太が発言する。さつきから「降参」とか「降伏」とかいつているが、何かほかによい言葉はないものだろうかという問いかけであつた。確かに「降参」や「降伏」であるにはちがいないのだが、もつと体裁のよい言葉はないかというのである。それでは「帰伏」はどうかといった意見などが出、議論の末に結局「帰順」にたどりつくのだが、それらの過程が記されているのが④16である。冬芽書房版でははじめから「帰順」という言葉が使われ、理論社版ではそれ以前には「降参」や「降伏」であつたことはいうまでもない。この部分については永平も問題にしている。「討議の過



程を詳しく描くことで臨場感を増そうとする。作者の意図は分からねことはない。」としながらも、「あまりに回りくどい、果して必要であったかどうか。」と疑問視している。確かになくもがなの記述であったとはいえるであろう。だが、それは「あまりに回りくどい」からというよりは、そのような議論にリアリティーがあるかは疑問だからだというべきであろう。すなわち、幕末から明治にかけてのこの時期の人々が、はたして「降参」や「降伏」という言葉にこだわることがあり得たかということである。それをはっきりと証明する手だてはないが、はなはだ懐疑的だといわざるを得ないのである。永平の論についてもうひとつ指摘しておけば、「討議の過程を詳しく描くことで臨場感を増そうとする」というのはどう考えてもおかしいであろう。冬芽書房版ではもともとこの問題についての討議はなく、かつ【7】は人々の討議を中心として描かれていた部分だったからである。討議の場面に新たな討議を加えればより「臨場感を増す」ということなどはあり得ず、もともとなかった討議についてその「過程を詳しく描く」けば「臨場感を増す」というのは意味不明というほかはない。

【9】、冬芽書房版の〈7〉には、すでに触れた△4と会話の記述の追加しかないが、これについては今見た部分と関連があるので触れておく。ここには郡代役所の明け渡しを聞きつけた人々が混乱する様子が描かれている。人々の会話が描かれている部分に、①17の新たな会話の記述が加えられている。そこで話題になっていたのが帰順ということについてであった。ある人物が、「キジュン？ そりやいったい何のことじゃい？」と問いかけ、他の人物は「おれにも分らぬがのう」と答えつつも、「ただ地役人衆が降参せぬ気でおるのは本当らしいぞ」と述べる。さらに、「キジュンなんて、あんまり聞いたことの無い言葉じゃが」という発言に対して、「降参せぬという以上、キジュンっていうのは、敵をやっつけることに違いないぞ」と述べている。ここは明らかに先の①16の記述をふまえた記述である。地役人らが「降参」や「降伏」という言葉を避けようとしたために、人々は地役人らが「降参せぬ気でおる」と考え、「帰順」とは「敵をやっつけること」とだと勘ちがいのたのである。「降参」や「降伏」という言葉に何の抵抗もない人々にとって、それは無理もないことだったといえるであろう。その意味で、この部分にはリアリティー

があつたといえるのではなからうか。

【12】、冬芽書房版の〈10〉は、鎮撫使先発隊の警護として郡上藩がやって来るとの知らせがあつたことが記されている部分である。冬芽書房版では冒頭に郡上藩入国の情報が届いたことが記されていたが、理論社版ではその前に①18が加えられていた。郡代役所の明け渡しが決まり、郡代の妻子らが江戸へ向け出発したことを知った人々は不安を抱く。その人々の不安が描かれていた。人々が不安にいなな、それがいわば的中するがごとく郡上藩入国の知らせが届くという形になっていたのである。然るべき追加であつたといつてよいであろう。もうひとつの①19は、郡上藩家老鈴木兵左衛門の思惑が記されていた。一言でいえば、飛騨支配の方策に関するものといつてよい。郡上藩の野心についてはのちにも記されることになるが、最初の登場部分に記しておくことは無駄とはいえないであろう。

【13】、冬芽書房版の〈11〉は、安永年間の大原騒動について記されている部分である。飛騨の人々がなぜ郡上藩を嫌悪したのかという歴史的経緯を、安永年間の大原騒動にさかのぼって説明したものである。①20から①25までの六つの追加は、いずれもその経緯をより詳しく説明しようとしたものと見てよい。改稿時における新たな資料の入手か、資料の読み直しによる新たな発見によるものとも考えられる。そんななかで、一箇所省かれた部分がある。大原騒動が起こった原因の張本人というべき大原郡代の墓が今日も残っていないことを記した□5の部分である。墓が残っていないのは、むろん人々の深い恨みをかっていたからで、寺の和尚がひそかに建ててやつても必ず誰かが破壊したというのである。この部分をなげことさらに省かれたのかはよくわからない。

【14】、冬芽書房版の〈12〉と〈13〉の前半は、郡中会所について記された部分である。飛騨三郡の村々が自主的につくった郡中会所という組織について説明されているのだが、そこに郡中会所の役割を記した①27が加えられている。むろん、他にも記されているのだが、その補足と見るべきものである。この部分の後半には、その部分における人々の会話が描かれている。①28は、それら人々が次第に集まってきたことが記されている。これまた同様な記述があるのだが、人々の名前をあげながらこれらの人々もまたやつて来たという記述で、やはり補足的な記述と見

てよいであろう。④26と④29の会話の記述については割愛する。

【15】、【16】にはいずれも多くの変更があるが、そのほとんどは会話と様子の記述であり、またそれ以外のいくつかの箇所も特に取りあげるべきものとは判断されないで省略する。

そこで次は【21】、冬芽書房版では（19）の部分である。郡代役所を明け渡すことになり、新見郡代は江戸に向け出発する。高山を出、美女峠を越えるあたりまでが描かれているのだが、その途中で郡代が動けなくなり、人に背負われて進んだという④44の記述が加えられている。永平和雄もいうように、「新見を卑小に描こうとする」意図があったと考えられる。永平は、それを「作為」といい、「これも水増しの印象の一例であろう。」と否定的である。新見郡代については作品はじめの評定の場面から終始「卑小」に描かれており、ここで新たにそのような場面を加えることは確かに「水増し」ともいえるかもしれない。だが、徹底的に「卑小」に描くその一記述だと考えれば余計な記述とはいえないであろう。もうひとつの④45は、新見の感慨が記されている。他にもそのような記述はあるが、その補足と見てよいであろう。

【24】も変更が多いが、すべて会話と様子の記述なので省略する。

次は【25】の部分である。ここは単位レヴェルの変更のあったところで、冬芽書房版では（23）と（25）の離れた二つの部分あたる。それについては前稿で検討した。竹沢寛三郎が鎮撫使先発隊として京都を出発し、飛驒入国の布石として笠松郡代役所を帰服させるまでが描かれているが、はじめに竹沢の人となり記され、次に岩倉具視に会い委細を聞く場面が描かれている。その部分に、④59が加えられている。会話の記述であるが、この部分については触れておく必要がある。岩倉と竹沢の会話であるが、その内容は年貢や運上等の軽減に関するものであった。竹沢は、鎮撫にあたっては年貢や運上等の軽減といった目に見える恩恵を施さなければうまくいかないのではないかと主張する。それに対して岩倉は同意を示し、年貢半減を口にする。竹沢は、それであるなら人々はこぞって朝廷の側について来るであろうと喜ぶのである。実際、竹沢はのちに年貢半減その他運上等の軽減を人々に約束するのだが、この部分を加えることで、竹沢の約束は独断ではなかつ

たということになる。冬芽書房版ではそのような記述はなく、竹沢の独断であったと読めるのである。永平和雄もこの部分に触れ、「年貢半減」の了解が明示されたことで、「竹沢の約束の「根拠が明らかになった。」と述べている。さらには、第二部に記されることに関わるものだが、「後任者梅村との最初の会談のときにも、梅村の詰問に答えて、竹沢は岩倉の了解を持ち出して反論している。」と述べている。年貢半減その他運上等の軽減の約束が竹沢の独断であったか否かは、この作品においては重大なちがいになる。のちに竹沢は失脚し、その理由、少なくともそのひとつの理由となっていたものがその約束であり、また約束はのちに反故とされてしまうからである。すなわち、約束が竹沢の独断であるならば、失脚させられたことには一定の正当性があり、約束の反故にもまた正当性があることになる。反対に竹沢の独断でなかったのなら、竹沢はいわれのない理由によって、少なくともいわれのないことをひとつの理由とされ失脚させられたことになり、約束反故の正当性も失われるのである。要するに、竹沢の独断とする冬芽書房版の方がおよそ正当性を保つ展開となり、独断ではないとする理論社版が正当性を欠く展開となるのだが、あえて独断ではないという展開に変えることによって、あらわになつてくるものがあつた。それは、今述べた正当性のいわば主体ともいふべき朝廷ないしは新政府の狡猾さ、あるいは老獪さといったことである。竹沢を失脚させたのも、約束を反故にしたのも朝廷ないしは新政府であり、正当と述べてきたのはほかならぬそれらの正当性であつたことはいままでもない。そして、その狡猾さ、老獪さということは、すでに岩倉と竹沢の会談の場面にあらわれていたのである。永平は「年貢半減」の了解が明示された」と述べていたが、そうはつきりといつてよいかはなはだ疑問なのである。岩倉は次のように述べていた。

「鎮撫使はまずこの年貢半減をつかつて、とりあえず百姓どもを朝廷の味方にひき入れるのも便法じやろう。じゃが、朝廷としてもじつさにそんなことができるかどうかは、むろんもつと先へ行かねばならぬことじやによって、そのへんはまア、貴公もよく心得たうえでうまくやつてもらわにやなりませぬ」

岩倉は、実際にできるかどうかはわからないと述べた上にはっきりと「便法」と述べている。この発言のすぐ前には、関西方面の一揆で年貢半減を要求しているが、「これはまったく無茶な申し出でじや」とも述べていた。要するに、岩倉は年貢半減を本気で考えていたわけではないといわざるを得ない。だからこそ岩倉は、「そのへんはまア、貴公もよく心得たうえでうまくやってもらわにやなりませぬ」というような曖昧な言い方をしていたのである。ところが、竹沢はまさに「年貢半減」の了解を明示されたものと理解したようなのである。その後の竹沢を見てもそう判断するしかない。つまり、竹沢は岩倉の意をくむことができなかったともいえるわけだが、しかし岩倉の言にはそもそも無理があったのである。竹沢は、はじめから岩倉の老獪さのわなにはまっていたといわざるを得ない。だが、竹沢もすぐに納得したわけではなかった。先の岩倉の発言のあとに、口達を画面にしてたまりたいと申し出るのである。それに対して岩倉は、今日中には間に合いかねる、そのために出発をのばして機を失うようなことがあつてはならぬから、自分の言葉にまちがいはないからすぐに進発するように諭すのである。結局、それで竹沢は納得してしまうのだが、冬芽書房版にもその記述はあつた。だが、そこで岩倉がいつていたのは、目的はあくまでも鎮撫にあるので、せいぜい道理を説いてできるだけ血なまぐさいことは避けるようにということだけであつた。竹沢はそのことを書面にして欲しいといっていたのである。それであるなら時間があれば書面にしても差しつかえないものであつたといえるであらう。だが、理論社版では当然のこと年貢半減のことをも書面にすることを意味する。竹沢がこだわっていたのもそのことにあつた。理論社版では、「年貢半減の件なぞ、殊に重大だと思われたからである。」という一句が加えられていた。理論社版では、年貢半減の言質をとられぬように書面にすることを周到に避けたというように理解できるのである。ここにも岩倉の老獪さを見ることができ。他は会話と様子の記述なので割愛するが、ひとつ省かれた部分があつた。㊦11の、朝廷の命を受けた郡上藩も飛驒へ向け進発したことが記されている部分である。竹沢の進発に続けて、同じく朝廷の命を受けた郡上藩の進発が同様に記されているわけで、特に省く必要はないといえる。ただ、それ以前に郡上藩の飛驒入国については何度も

記されている。おそらくは、ここで改めて記すのは少々くどいと考えたのではなからうか。

【26】、冬芽書房版の(24)は、郡上藩が入国し、人々が反発を強める様子が描かれている部分である。冒頭、㊦61が加えられている。ここには、情勢不安の折、鎮撫使先発隊に期待を抱きはじめる人々が描かれている。新見郡代が去つたあとはいわば無政府状態になり、治安維持への不安が高まつた。そんななか、人々は鎮撫使先発隊への期待を抱き、その到来を待ちはじめようになるのである。すでに郡上藩入国の情報を得ていた人々にとってそれはなおさらであり、事実のちに人々は先発隊の竹沢を頼り、郡上藩排除に専念することは改めていうまでもない。然るべき追加であつたといえるであらう。その記述にすぐ続けて、役所から出された布告が記されていた。冬芽書房版ではそれが冒頭となるわけだが、少々唐突な感否めない。その意味でも㊦61は然るべき追加だったといえるが、そのあとに㊦62が加えられている。布告について記された部分であるが、布告のある微妙ないい方について述べられている。それは、郡上藩に対する態度に関するものであつた。そこには、注意深く名指しを避けながらも、万一反法な行ないがあつても先発隊の竹沢を頼めば恐れるに及ばないことを意味したものであることが記されていた。ここは㊦61の記述と関連しているともいえるであらう。㊦63と㊦64はいずれも短かい記述だが、それぞれ補足的な記述としてむだではないであらう。㊦63は竹沢の一刻も早い到着を待つ人々が描かれ、㊦64は対郡上藩の方策を議論する人々が描かれていた。㊦65は会話の記述なので割愛する。

次は【27】の部分である。ここも単位レヴェルの変更があつたところで、冬芽書房版では(26)の前半と(28)の前半の離れた二つの部分にあたり、しかも(26)の前半はさらに二つに分断されて構成されている。郡中会所総代が、国境にまで迫つた竹沢を迎え口上書を差し出すことが記されている部分であるが、その冒頭に㊦66が加えられている。ここには、鎮撫使先発隊が鈴木兵左衛門率いる郡上藩と合流したことが記されていた。郡上藩の一部はすでに一足早く飛驒に入っていたが、本隊というべき家老鈴木率いる一隊とここで合流したのである。然るべき追加であつたといつてよいであらう。郡中会所総代らが差し出した口上書は三項目に



まとめられていた。その口上書が引用されたあとに、その第一項に関する説明を含む⑬の部分省略されている。そこには、竹沢が郡中会所というものの存在をはじめ知ったことも記されていた。これは、④67との入れかえと見ることができる。④67は、竹沢が郡中会所及び安石代について総代らに問うたことが記されていた。竹沢の問いに対してむろん総代らは説明をするのだが、その内容は記されず、郡中会所については「初め老久蔵がこたえていたが、やがて久左衛門や市次郎も口をそえた。」と記されていたのであった。安石代についても、「総代たちは、天領飛州に独得なこの救恤にちかい年貢の取立て方について熱心にくわしく説明した。」とあるだけであった。さらには、それに続けて括弧づけで次のように記されていた。

（安石代その他の特別な年貢制度については、この作の第二部および第三部に  
 おいて詳細に説明しなければならないので、この章ではわざと省いておく）

説明の内容が記されなかった理由はここにいわれているとおりであろう。郡中会所については以前に詳しく説明されていた。⑬を省き、その入れかえとして④67を加えたのは、以前に説明したこと及びのちに説明する予定のものと重複を避けるためだったのである。だがそれにしても、括弧づけで記された部分は少々奇妙な書き方であるといわざるを得ない。作品において、いわばその作品に関する解説を行なっていることになるからである。括弧づけをしていたのもそのためであろう。もちろん、このような書き方が稀有というわけではない。ただ、初稿から冬芽書房版に至るまでこのような書き方はなかった。次に、口上書第二項に関する説明である⑬の部分も省略されている。これについては先のような入れかえにあたる追加の記述はない。だが、第二項に関する説明が消えたというわけではない。それについては前稿で単位レヴェルの変更を検討した際に述べたのでく  
 りかすことはしないが、要は冬芽書房版では第二項に関してはだぶっている部分があり、その部分をここで省いたという形になっているのである。省かれた部分  
 はもうひとつある。総代らが再度の嘆願をうかがうことを記した⑭である。そ

の後何の変化も見られなかったからであるが、省いたのは少々拙速と判断したからではなからうか。

【28】も変更は少なくないが、構成の変更のほかすべて会話と様子の記述なので割愛する。

【30】、冬芽書房版（28）の後半部分は、手代の近藤英一郎が竹沢及び郡上藩の鈴木に願い出、郡上藩の一部退去に成功するまでが描かれている。⑦2と⑦3は竹沢に願い出た部分にあるが、前者は近藤が飛驒の人々が郡上藩を嫌う理由を説明した部分、後者は同じく近藤が郡上藩に飛驒横領の野心があることを主張した部分である。冬芽書房版ではそのような説明がなく、郡上藩退去を願う理由としてはやはり説明不足であることは否めない。然るべき追加であったといつてよいであろう。あとはすべて会話と様子の記述なので割愛する。

次は【37】、冬芽書房版では【33】の部分である。ただし、【33】は三つに分断され、その前とあとの部分で構成されている。郡上藩の鈴木から呼び出しを受けた郡中会所総代らが、鈴木のもとへ向かうその途中が描かれている部分である。代官橋にさしかかったとき、総代らは欄干に張り紙がしてあるのを発見するのだが、その直前に④87が加えられている。張り紙の前に目に入ったのは欄干に結びつけられた荷物であり、そのことについて記された部分である。その荷物は、百姓たちがよそで用をはたすあいだ、人手にあずけるようにして欄干に結びつけておくものであることが記されていた。なくてもかまわないが、あつてもまた差しつかえないといった程度のものというほかはない。なお、先にも指摘しておいたが、冬芽書房版では、代官橋は鍛冶橋に、欄干は擬宝珠になっていた。それはさておき、張り紙に書かれていたのは総代に対する訴えであった。それに対して甲村の孫助は腹を立てるのだが、そのあとに④89が加えられていた。孫助と牛方源兵衛との確執が記されている部分である。源兵衛は同じ甲村に住んでおり、張り紙の訴えを見て孫助が日頃からの確執を思い起こすという形になっているのである。ここはおそらく、源兵衛という人物をクローズアップしようとする記述の一環であったといつてよいであろう。前稿で述べたように、理論社版ではこの源兵衛を大きくクローズアップしようとしたことは明らかである。冬芽書房版では名前のな

かった牛方親子に源兵衛と幸作という名前が与えられたのもそのひとつであり、その他にも様々な形で源兵衛は登場していたのである。あとは会話と様子の記述なので割愛する。

【39】、冬芽書房版の(35)はすべて会話と様子の記述であるが、④95と④98については触れておく必要がある。いずれも記述量のやや多めな追加である。郡上藩の鈴木のもとに行った郡中会所総代らが、米三百俵提供の旨を伝えられるが辞退することが記された部分である。④95は、元禄年間に領主の金森が出羽へ移封になり、幕府の命を受けた金沢藩が城をとりこわしたできごとを話題にした部分である。むろん、飛驒の人々は金沢藩を大変恨んだということであり、これは郡上藩がからんだ安永年間の大原騒動を連想させ、また今回の郡上藩飛驒入国と重ね合わされるような話題であり、有効な追加であったといつてよいであろう。もうひとつの④98は、主として鈴木が発言している部分である。鈴木は、郡上藩は竹沢と同じ勅命によって出向したのであり、単なる警護の兵隊と考えるのはまちがいであることを主張する。武力の面では郡上藩の方が比較にならぬほどまさっており、もしもそれがなかったなら鎮撫の功も奏さなかったであろうというのである。さらに鈴木は、竹沢は鎮撫使先発隊としてやって来ているのであり、鎮撫が一応片づけばよその鎮撫に回されるかもしれないという。そうなれば、ものの順序として飛驒は郡上藩お預けになると述べるのである。総代らはむろんそれを聞いて度を失うのだが、しかしそのことは誰も予想をしなかったことではなかった。郡上藩に対しては十分な警戒心を持っていたことは改めていうまでもない。ただ、その張本人というべき鈴木の中から直接聞かされたことに驚きを隠せなかったのである。当の郡上藩側からこのようにはつきりといわれることによって、飛驒の人々が抱いていた恐れはいわば確証のあるものになってしまったのである。冬芽書房版では、そのような意味での確証があったわけではない。いわば確証がないゆえに不安であり、そのことによってまた恐怖が増すという状態であったといつてよいであろう。そのような状態が、この部分の記述によって解消されてしまうことになるのである。その意味で、この部分はかなり決定的な記述といえるのだが、のちの記述ともかかわっているので、その際に再度検討することに

したい。

【40】、冬芽書房版(36)の前半部分は、総代らが一旦郡中会所に戻り人々と相談する場面である。その冒頭に、町年寄の屋貝権四郎も連れて郡中会所に向かったことが記されていた④99の部分に加えられていた。先には触れなかったが、【38】の冒頭には、途中町会所に寄り屋貝を誘い同道したことが記された④91が加えられていた。冬芽書房版では屋貝ははじめから同道しており、郡中会所に戻る際には途中で別れている。屋貝がはじめから同道しているか否かは大きな違いではないが、途中で別れるか否かは明らかにいが生じる。すなわち、郡中会所での相談の場面に屋貝がいるかないのかのちがいである。だが、【40】の場面では屋貝は一言の発言もしていなかった。記述量も少ない会話の記述、④101が加えられていたにもかかわらずである。屋貝が発言するのは次の【41】の冒頭部分においてである。もちろん、④103の追加部分である。やや先走る形になるが、その部分を見ておきたい。屋貝は、急に立ちあがって帰りそうにするのを呼びとめられる姿から描かれる。まだ話し合いの決着がついていないのだから当然のことである。屋貝は、「おうけせぬことにきまったのじやろ。それでええと思うが」とにべもない。それに対して総代の一人は、「でも、鈴木へこれをお返しに行かにやなりませぬで、御足労でも、ぜひまたわしらと同道して貰いたいのじやが」という。「これ」とは鈴木からの御達書であるが、総代らはそれを返却し、鈴木の申し出を断わるつもりだったのである。そういわれて屋貝は、「そいつア弱った。こんどはわしはかんべんしてもらいたい。う。どうも、あの家老とはもう会いたい無いのじや」と本音をもらすのである。だが、屋貝は結局同道することになる。それでも屋貝は往生際悪く、次のように述べるのである。「おねがいじや。お達しがきはわしがあずかつてきたが、返すときは郡中の誰かにやってもらいたい」と。そこで、仕方なく総代の市次郎が預かり出かけて行くのである。【40】冒頭の④99の追加部分に戻れば、ここで屋貝も連れ郡中会所へ向かう設定にしたのは、相談の場面において町年寄屋貝の醜態を描くためであったといつてよいであろう。【38】の④91で、総代らが途中町会所に寄り同道したことを加えたのも、いわば屋貝の所在をはつきりさせるためであったといつてよいかもしれない。ただ

し、ここでことさらに屋貝の醜態を描く必要があったかどうかは疑問が残る。④100は、総代らが鈴木のお達書を集まった人々に披露するという記述であり、そのお達書が引用されてもいる。また、④102には村役人らの立場と決意が記されている。郡上藩排除のために、自分達のおかれている立場として身命をなげうつても闘わなければならないという決意である。いずれも然るべき追加であったといつてよいであろう。

【41】、冬芽書房版（36）の後半部分は、相談の結果やはり辞退に決定し、再び鈴木のもとへ行きその旨を告げるまでが記されている。④103については先に見た。残りはすべて会話の記述であるが、④103との関係上、またのちの記述との関係上触れておく必要がある。④19は村役人らの会話であるが、これは④103との入れかえと見ることができる。屋貝を中心とする④103の追加によつて、もとの会話が省かれたのである。ただし、その一部は④103にも生かされているところがある。④20の鈴木と総代らの会話も同様、④104との入れかえと見ることができるが、ここでのちがいは次の点にある。④104では申し出を断られた鈴木が激怒する言葉が記されているのだが、④20では小前百姓も集めてもう一度相談してどうかという鈴木に対して、総代らはそれではそうすることにし、のちにまた返事をする約束するのである。理論社版でその部分を省略し④104に入れかえたのは、それでは少々くどいと考えたと同時に、決意を持って臨んだ総代らがそのような提案をあっさり受け入れるのは不自然だと考えたのではなからうか。

【42】、冬芽書房版の（37）は、人々が総代らの辞退を評価し、郡上藩への反発を強める様子が記されている部分である。まずは省かれた部分の④21であるが、ここには再度返答するという鈴木との約束が反故にされたことが記されている。今先に指摘した④20が省略された以上、④21の省略は当然である。④105は人々が総代らの対処を評価する記述、④106は鈴木が新しく城を築こうとしているとの評判を聞き反発する人々の記述である。要は、【42】の内容としてまとめたものと一致するのだが、実は冬芽書房版のこの部分は、④21とした部分のほかに謎かけが二つ記されているだけのごく短い記述にすぎなかった。したがって、この部分は単位レヴェルの追加に近いといつてもよい。④105は然るべき追加であったといつ

てよいであろうが、④106はやや唐突の感がないでもない。改稿時における新たな資料の入手か、資料の読みなおしによる新たな発見によるものという可能性もある。

【43】、冬芽書房版の（38）は、竹沢が町年寄の矢島善左衛門に郡上藩のことを語る場面である。その冒頭、④107が加えられている。ここは、同じ町年寄の屋貝が町会所で矢島と出くわし、郡上藩鈴木とのことのあらましを伝えたことが記されている。そのはじめに、「三百俵返上の任務をおえてから、屋貝は途中で郡中の総代らとわかれて、どうやら無事でもどれたことを喜びながら、町会所へいそいだ。」とあり、その後の屋貝の行動が記される形になっている。先に見た屋貝の所在をはつきりさせる記述の一環といえないこともないが、それだけのことでなかった。この場面でも郡上藩からの米三百俵提供のことが話題になるのだが、冬芽書房版では、それは竹沢からいい出されていた。理論社版では、それが矢島からいい出されることに変わり、竹沢はそれを聞いてはじめて知ることになるのである。矢島は、つい先に耳に入れたばかりの情報を竹沢に伝えたのである。その点で④107の追加は有効な記述であったといえるであろう。もつとも、冬芽書房版においても竹沢の発言のあとに、それについては矢島も屋貝から聞いていたと記されていた。だが、理論社版のようにその場面は記されていなかったのである。加えて、竹沢からいい出すよりは当事者である矢島の方からいい出すという理論社版の方が自然であるといえるであろう。もうひとつ、④112の竹沢の考えが記された部分が加えられているが、これはほぼ④22の省略部分との入れかえといつて差しつかえない。むろん、完全に重なるわけではないが、郡上藩に対する考えやこれからの飛騨統治に関する考え方が記されている点では同じである。他はすべて会話の記述なので割愛する。

【44】、冬芽書房版の（39）は、矢島が竹沢のもとからの帰り道に川上屋善右衛門に出会い、そこに合羽屋のおらくが行きかかる場面である。④113は、タコあげをする子供たちが描かれていた。点景描写として適当な追加であったといつてよいであろう。④24は、おらくの美しさについて記されている。おらくの美しさについてはこのすぐ前の部分から詳細に記されており、少々くどいと考えたのではな



かろうか。その代わりというわけではなからうが、④115の、おそらく一家の暮らし向きが記されている部分が増えられていた。いずれも然るべき省略と追加であったといえるであろう。他はすべて会話と様子の記述なので割愛する。

【45】、冬芽書房版④0の前半部分は、竹沢が中呂村の久蔵に郡上藩のことを語る場面である。④117は中呂村久蔵について、④118は竹沢と久蔵の会談場面が記されている。冬芽書房版のこの部分は、久蔵が竹沢のもとへ行き郡上藩のことを語り聞かせたという三行ほどの記述にすぎず、然るべき追加であったといつてよいであろう。

【46】、冬芽書房版④0の半ば部分は、町会所と郡中会所が相談し郡上藩の件で嘆願書を作成することが記されている。④119は矢島の報告、④120は久蔵の態度と見解が記されている。竹沢に直接会い話を聞いてきた二人の人物による報告と見解が記されているわけで、然るべき追加といえる。④123は願書の内容が記されている。ごく簡単な記述であるが、少しあとには願書そのものが引用されており、特に加える必要はなかったといえるであろう。④124は、竹沢への不満を語る一部の人々が描かれている。主な不満は仏教をひどく嫌っていることと、地役人をそのまま役人として採用したことであった。人々は代々仏教を信仰し、地役人の横暴と圧制に悩まされていたことはいまでもない。これらの不満はのちにしだいに高まっていくことを考えれば、有効な追加であったといえるであろう。④125は総代の感慨が記されている。すなわち、願書という形にせよ身分の低い者が政治についての要請ができることになったことへの感慨であり、然るべき追加といつてよいであろう。最後にもうひとつ、省かれた部分である。④26の、郡上藩の飛騨横領の野心に反発する記述である。ここで、ことさらにこの部分が省かれたのには理由がある。そこには次のような一節があった。

そこへどこからともなく、このさい青山藩に飛州横領の野心があるという噂がひろまっていた。誰もそれについて確かな証拠をもつていたわけでは無かったが、民衆はそれを信じた。

先には、【39】における④98の追加部分に触れ、それがかなり決定的な記述であったことを指摘した。すなわち、郡中総代らの前で、郡上藩の鈴木が飛騨の郡上藩お預けの件を口にしたことである。そのことによつて、人々が抱いていた恐れは確証あるものになったのである。この部分が省かれたのは、その記述が追加されたためであることはいまでもない。冬芽書房版ではその記述がないため、それはあくまでも「噂」であり、「確かな証拠をもつていたわけでは無かった」のである。だが注意すべきなのは、そこに次のような記述があったことである。

ところが今、はしなくも、ほかならぬ天使竹沢によつて確証を与えられたのである。

「天使」とは、人々の勘ちがいにはかならないがそれはさておき、ここで「竹沢によつて確証を与えられた」と記されているのは、矢島を呼び郡上藩のことを語った際の竹沢の言葉によるものと考えられる。竹沢は、「この鈴木がなか／＼のくせ物で、これをしおにして、飛州を郡上藩へ横領しようとくらんでおる」と述べていた。先に指摘したように、冬芽書房版では久蔵との会談場面は記されていなかったが、竹沢は同様のことを述べていたと解釈できる。しかし、これはあくまでも竹沢の言葉であつて、先に見た④98の部分のように当の郡上藩側から直接聞かされたものではなかった。その意味で、「確証」とはいえないといふべきであろう。少なくとも、それと同様な意味での「確証」とはいえないのである。ただ、地の文においては次のような記述があった。

殊に鈴木は高慢で、野心家で、道中でも一どならず竹沢にむかつて、「このさい飛州は郡上藩におあずけとなる」はずだと臆面もなくもらしていた。

いわば竹沢にとつては「確証」あるものであったといえるが、しかし竹沢は矢島に対してそのことを述べてはいなかった。冬芽書房版ではあくまでも竹沢の言葉であつて、郡上藩側から直接聞かされたものではなかったのである。④98の追加

が決定的な記述であると述べたのはそのためである。理論社版では④98の追加があったために、矢島や久蔵との会話にもそのことがはつきりと記されていたことはいままでもない。矢島に対して竹沢は、「じつは、こんど高山へまいる途中でも、予にむかつて一度ならず、鎮撫の上はぜひとも飛州を青山藩あずけということにお骨折ねがいたいと頼みこんでおる。」と述べていた。また、冬芽書房版にはない久蔵との会話場面においても、「竹沢は青山藩の好ましからぬ動きについて、だいたい矢島に話したと同じ内容をつたえた」と記され、また久蔵は「ただいま殿さまの仰せきけられましたことと、家老鈴木の申しきけたこととは、ぴったり話が合うわけでござります。」と述べていた。冬芽書房版と理論社版のいずれがよいかは一概にはいえないであろう。ただ、冬芽書房版では真の意味での確証がなく、それゆえに不安であり、そのことによってまた恐れが増すという状態をつくりあげていたことはまちがいない。それに比べれば、理論社版は少々ストレートにすぎるといえるのではなからうか。

【52】から【57】までは、広瀬村の五郎作を中心として記されている部分であるが、そのほとんどは会話と様子の記述であり、またそれ以外のいくつかの箇所も特に取りあげるべきものとは思われないので省略する。

次は【58】、冬芽書房版では（51）の部分である。ここは、郡上藩の鈴木が竹沢に不満を述べ対立する場面である。その冒頭、竹沢の考えが記された④143が加えられている。幸い飛驒の鎮撫に成功した現在、自分がこの地方の支配者としてふるまうことが当然の任務でもありまた権利であるという考えであり、天朝御領の宣言も年貢半減の約束も郡上藩に相談なく行なったのはそのような考えからであることが記されている。そのことがまさに鈴木的不满とするところだったわけである。然るべき追加といえるであろう。④145は面会場所へと進む鈴木が描かれ、④146は鈴木を待ち受ける竹沢が描かれる。これまた、然るべき追加といつてよいであろう。そのほかはすべて会話と様子の記述なので割愛する。

【60】、【62】、【63】の会話と様子以外の記述については特に取りあげるべきものとは判断されないので省略する。

そこで、次は【65】、冬芽書房版では（58）の部分である。お光姉妹の家に郡上藩

がいるとの情報を聞き、火方たちが踏み込む場面である。④161は、火方の増造が若い火方の吉太郎に郡上兵の動静を見張るように指示する記述である。冬芽書房版では、吉太郎はただ名前が出てくるという程度の人物にすぎなかったが、ここで少し出番の場を作ったのである。吉太郎と増造の会話の記述である④163の追加も、同じ趣旨だったといえるであろう。ただし、冬芽書房版では、吉太郎は吉助となっていた。④28はうどん屋の主婦、つまりお光姉妹の母親と火方たちとの会話であるが、なぜことさらに省かれたのかは不明である。他については割愛する。

【67】、冬芽書房版（59）の前半部分は、嘆願のために大垣へ向かう百姓たちの道中が描かれている。その前の【66】は、理論社版で新たに加えられた単位であった。そこには、同じく大垣へ向かう百姓たちの様子が描かれていたのだが、その中心として描かれていたのが甲村の源兵衛であった。理論社版において、この源兵衛を大きくクローズアップする記述へと変化するのだが、源兵衛の行動を記した④166の追加もそのひとつであったといつてよいであろう。他は会話と様子の記述なので割愛する。

【68】、冬芽書房版（59）の後半部分は、百姓たちが国境を越えて大垣に迫るまでの行動が記されている。④167は一行が途中の関宿に到着したこと、④170は早駕籠で駆けつけた宮ノ前村の久兵衛に励まされて再び歩き出す百姓たちが記されていた。いずれも無駄な記述とはいえないという程度の追加といえるであろう。他は会話と様子の記述なので割愛するが、④30は④170との入れかえと見ることができ。ただし、その一部は④170にも生かされている部分がある。

【71】、冬芽書房版（60）後半部分は、宇田栗園に会った郡中会所総代らが竹沢にその報告をするという記述であるが、冬芽書房版には実はその報告の場面は記されていない。然るべき追加といつてよいであろう。

【72】、冬芽書房版（61）は、郡中会所での百姓たちのおしやべりと謎かけが記されている部分である。④177は村役人が不在なので百姓たちが気兼ねなくふるまっていたこと、④178は迫いすがり願いの人々が多く戻ってきたことが話題になったことが記されていた。これまた、いずれも無駄な記述とはいえないという

程度の追加といつてよいであろう。④179は新宮村の勝次について記されている部分であるが、この人物の名前は冬芽書房版には記されていない。人物の説明として然るべき追加といえるであろう。他はすべて会話の記述なので割愛する。

【73】、冬芽書房版の(62)は、郡中会所総代らが再度の嘆願に総督府へ行くが、そこで郡上藩お預けを言い渡される場面である。前日の嘆願の際には参謀の宇田栗園にも面会でき、比較的よい感触を持っていた総代らにとつてそれはまさに青天の霹靂であった。もっとも、よい感触というのは勝手な思い込みにすぎないともいえるのだが、その際に宇田は、太政官への問い合わせも必要であるから数日の猶予を要求していた。それが一夜明け、急転直下郡上藩お預けとなつたのであるから総代らの動揺はもつともなことである。④183と④185は、言い渡される以前の記述部分にあるが、いずれも総代らの迷いや不安が記されている。比較的よい感触を持っていたとはいえ、それで不安が解消されたわけではなく、そうであるからこそ再度嘆願にも赴いたのである。然るべき追加であつたといふべきであろう。④182は総督府本陣の動静について記されている。むろん他にも記されているが、その補足と見るべきものである。他は会話と様子の記述なので割愛する。

【74】、冬芽書房版(63)の前半部分は、総代らが郡上藩お預けの件を竹沢に報告することが記されている。④186は宿にいた他の人々と相談したことが記されている。冬芽書房版にも「小前百姓の総代らとよく相談して」とだけは記されていたが、その補足的な記述といつてよい。④187は情勢を高山に伝えるために人を送ることにしたことが記されている。然るべき追加といえるが、その使いの一人が例の牛方源兵衛であり、源兵衛を登場させるという意味もあつたといつてよいであろう。④33は総代らの情勢判断が記されていたが、なぜことさらにこの部分が省かれたのかはよくわからない。ただ、次の【75】における④188と少々関わっていないともなうと思われ、のちに再度触れる。

【75】、冬芽書房版(63)の後半部分は、竹沢が急遽飛驒取締役を仰せつかつた旨を総代らに報告することが記されている。④188はその後の総代らの行動が記されている。具体的には再度総督府へ嘆願に行ったこと、その帰りに竹沢の宿に寄つたが不在だつたこと、そして宿に戻り評定を開いて今後の対策を話し合つたこと

などである。④188の記述はそこまでだが、そのような相談をしているところに竹沢から呼ばれ、飛驒取締役を仰せつかつたことを知らされるのである。郡上藩お預けの言い渡しも急なら、竹沢の飛驒取締役就任の知らせも急である。急なだけではない。どちらもどんでん返しともいえる急転回といつてよいであろう。とりわけ後者はそういえる。初稿から冬芽書房版に至るまで、この部分については大きく変更されることがなかつたことを考えれば、それはたくまれた展開だつたのかもしれない。だが、拙速の感はまだぬぐい去ることができないのである。というのも、竹沢の飛驒取締役就任を知らされたのは、郡上藩お預けを言い渡されたその日だつたからである。すなわち、竹沢に報告したあとに総代らは宿に戻り、その対策を話し合っている途中に突然呼び出されたのである。要するに、一日のうちに郡上藩お預けを言い渡され、一転竹沢の飛驒取締役就任を知らされたのである。さすがに、それではあまりにも拙速と考えたのではなからうか、理論社版ではじめてそこに一日の時間をおいた。それが、先の総代らの行動が記された④188だつたのである。すなわち、新たに加えられた総代らの行動は翌日のできごとだつたのである。先に、【74】における④33の省略は④188の追加と少々関わっていないともないと述べた。それは、その部分に時間の経過を誇示するかのような記述があつたからである。

総督府から不首尾を言いわたされた日、総代たちは一日忙がしく飛びまわつて、日ぐれ時分やつと宿へもどつてきた。

竹沢への報告から呼び出しを受けるまでにはやはり相応の時間経過が必要と考えられたのは当然である。この部分は、ことさらにその経過を示そうとした記述であつたといつてよい。だが、理論社版において一日の経過を加えたことによつて特に必要はなくなつたのである。だが、それだけのことならこの部分だけを省けば済むことであろう。やはり④33の省略はよくわからないというほかはないのである。それはさておき、理論社版においては確かに一日の時間をおいたが、それでもやはり拙速の感は消えないといふべきであろう。④190は、総代らがひそか



に京都へ向け出発したことが記されている。竹沢の飛驒取締役就任が決まった今、総代らの目的は達せられたことになる。だが、竹沢の任命が総督府のもので太政官のものではないことに総代らは不安を感じたのである。そこで太政官に願ひ出、確かな御沙汰書を手に入れるために京都へ向かったのである。用意周到というべきか疑い深いというべきか。だが、二転三転する方針に翻弄された彼らにとって疑い深くなるのも無理はなく、用意周到にもならざるを得なかったというべきであろう。冬芽書房版は、「宿へかえるとすぐ帰国のしたくに取りかゝった。」という記述で終わっており、京都へ向かったことは記されていなかったが、これでは少々問題がある。というのは、総代らは事実京都に向かい、そのまま「帰国」したわけではなかったからである。第二部は、京都の旅宿で総代らが祝宴をあげている場面からはじまり、目的どおり太政官からの御沙汰書をもらったことが記されているのである。④190は是非とも必要な追加だったといえるであろう。

【77】、冬芽書房版の⑥5は、竹沢の行なった政策と山に臨んでの竹沢の感慨が記されている部分である。④192は、年貢半減が人々の最大の関心であったことが記されている。いまさら述べるまでもない記述といえるが、その前の部分に年貢半減その他運上等の軽減を宣言したのちに何の沙汰もないことが記されており、然るべき追加だったといつてよいであろう。□34は、年貢半減は政府の方針ではなかったことが記されていた。この部分が省かれた理由はいまさらいうまでもない。先に詳しく述べたように、【25】における④59の追加部分で岩倉は年貢半減を口にしていたからである。④194は、竹沢がそうざの森へ行く途中に国分寺に立ち寄ったことが記されている。おそらくは、同行の福田稲太に誘われたからであったと考えられるのだが、竹沢は仏像を拝観しようとはせず、大きなイチョウの木に興味を示すのである。竹沢の仏教嫌いを示すひとつの記述として有効といえるであろう。□35は、竹沢がそうざの森へ参拝したことが記されていたが、これは④195の入れかえと見てよい。④195は、そうざの森に着いた竹沢が参拝しようとしたが、本尊が仏像であることに驚く様子が記されていた。ここでもまた竹沢の仏教嫌いが示されているわけで、少々くどいという気がしないでもない。□36は、竹沢の空想が記されていた。この部分についてはかつて詳しく検討をした。とい

うのは、ここは冬芽書房版において新たに加えられた記述であったからである。ただし、ここで省かれたのは後半の部分である。

そして彼はさらに、日本の現実と世界の情勢に対してまったく無智なるがまゝに、来るべき将来において、神格化された天皇のもとに成される侵略的な世界制覇をさえ、何か神話的な美しい奇蹟のように胸を躍らせて空想しているのであった。

大岡昇平はこの部分について、「平田門人の鎮撫使に、将来の太平洋戦争を予想させるのは、歴史小説としてまったくたふさぐたふさくない。」（『歴史小説に現われた農民』『文学界』64・9）と述べていたが、まったくその通りというほかはない。この部分を省いたのはたぶんそのことに気がついたのであろう。冬芽書房版でわざわざ加えた部分を、理論社版では省いたのである。省かれなかった前半部分にも「軍国主義」といった言葉が出てくるのだが、その言葉は削り、やや手を加えてもとの記述を生かす形で残されていた。④196は、そのような空想をしている竹沢を見守る供の人々が描かれていた。ここは第一部の末尾である。竹沢の空想で終わる方がよいのか、それを見守る供の人々が描かれて終わる方がよいかはにわかに判断はしがたいであろう。